
バカとデバイスと魔導師 ~バカが奏でる絆の曲~

銀臥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとデバイスと魔導師 ～バカが奏でる絆の曲～

【NZコード】

N6553X

【作者名】

銀臥

【あらすじ】

八年前：僕が九歳の頃から、全てが変わった。

僕は八年前、偶然『あるロストロギア』を体内に取り込んでしまつた。その時からだつた。僕が、魔導師になるきっかけになつたのは……そして、金色の長い髪に綺麗な紅い瞳の彼女と出会いつきかけになつたのも……

『P・T事件』、『闇の書事件』を解決し、月日は流れ、とある理由で文月学園に入学した僕。任務をこなしつつ、入学してから一年と少し経つた頃だつた……僕は、新たな事件に巻き込まれる。そ

して同時に、彼女達と再会を果たす。

バカとテストと召喚獣とリリカルなのはのクロスオーバー！！！
魔導師となつた明久が！雄二が！シリアルス&ハードボイルドに事件を捜査…なんてできるわけが無い（笑）！！バカな明久が捜査面では意外な活躍を！？そしてドキドキな彼女との同棲生活……巻き起こる、死亡フラグ……果たして、彼らは無事に青春を謳歌しつつ、事件を解決できるのか！？バカとデバイスと魔導師……ここに開幕！！

Prelude（前書き）

前に掲載していた小説を知り合いに消され、ブルーになつてました
が再び立ち上がりました！！
バカとりりなのクロスオーバー作品、どうか楽しんでください！

Prélude

深い、深い……闇。
その中心、一つのぼんやりとした光が見えた。

『……………』

『……………』

光の中で、誰かが話している。

そこに意識を集中せると、突然光が拡がつて闇を消した。

「……………」

この間いか、僕は海岸にいた。懐かしいなあ……」「……………

『フハイトやへん！アキハへん！』

あ、この声……

茶色の髪を二つに結った少女が、金色の髪の女の子と一緒にいた僕に、八年前の僕に向かって近づいてくる。

そうだ、これは……あの時、フハイトと僕の遭遇が決まって、本局の方に身柄が引き取られることになつた時だ……

『あんまり時間はないんだが、しゃべり話してることない。僕達は向こうへ向うるから』

『ありがとう……』

『ありがとう……』

『…………ありがとう』

僕ら三人はクロノさんにお礼を言つと、僕たちはしばらく見詰めあつた。

たくさん、しゃべりたいことはあつたんだけど、それでも、話せなかつた。何故か、話せないような気がしたから……

『話したいこと、いっぱいあつたはずなのに……変だね、フェイトちゃん』とアキ君の顔を見たら、忘れちゃつた

『私は……』

フェイトは何かを言いたそうにする。けれど、今まで人とあまり関われてこれなかつたフェイトには、上手くそれが表現できなかつた。そんなフェイトの手を、小さい僕は優しく握り締めた。

『大丈夫、フェイトが嬉しかった事を言えばいいんだよ』

『私は……』

一拍置き、フェイトは告げた。

『そうだね、私も、上手く言葉に表現できない……だけど、嬉しかつた』

『ふえ？』

『まっすぐ向か合ってくれて』

素直な気持ちを、彼女はなのはに伝える。

フロイト、僕が『アレ』を身体の中に取り込んで、管理局から逃げた時に匿つてくれた女の子……ジュエルシードを集めのを一緒に手伝い、『アレ』と一緒に手に入れたデバイスの使い方を教えてもらつた日々は本当に楽しかつた。

そして、なのは。

最初は敵同士だつたけど、そのまっすぐな気持ちに救われ、僕らは彼女と友達になることが出来た。

『うん！フロイトちゃんとアキ君と友達になれたらいいな、つて思つたの。でも、今日はもう、これから出かけちゃうんだよね？』

『そりだね…少し、長い旅になる』

『僕も…だから、しばらく会えないね……』

『……また、会えるんだよね？』

『……うん』

『もちろん』

フロイトの母親、プレシアは彼女の目の前で虚数空間に落ちた。とても悲しい事だけど、それは変えることも出来ない事実。だけれど、フロイトは最後の瞬間には母親と真正面からぶつかる事が出来た。

それは、彼女にとつて一番の成長だつたから……

「フヨイ……っ！」

彼女の名前を呟いた瞬間、辺りの景色が変わる。

「これって……」

その中では、白を基調としたバリアジャケットを身に付けている女の子と、赤いゴシックローラータ調のバリアジャケットを身にまとった女の子が協力して襲い掛かってくる触手と対峙していた。

『ちゃんと合わせりよ、高町なのは！』

『ヴィータちゃんもね！』

「なのは……ヴィータ」

そう、この一人は……なのはとヴィータだ……ということは、これつて八年前の『闇の書事件』……？といふ事は……きっと他のみんなも。

『盾の守護獣ザフィーラー砲撃なんぞ、撃たせん！』

彼、ザフィーラが前に出て魔法陣を展開させる。

その魔法陣から無数の棘が現れて、襲い掛かってくる触手を切り裂いていった。

『彼方より来たれ、宿木の枝…』

『「」の詠唱……もしかして！？』

茶色のショートカットの女の子が詠唱を終えた刹那、杖の先から魔法陣が展開され、その前に七つの銀色の魔力の塊が出現する。

『石化の槍、ミストルティン！』

魔法の名を叫び、杖を振り下ろす。

それが合図のように一気に七本の槍が化け物に向かって飛んでいく。

化け物の身体に刺さった槍は、刺さった場所から次々に化け物の身体を意思に変えていく。

「……はやて……」

僕は石化の槍を放つた少女を見下ろしながら、咳く。

この後の展開は……解ってる。そして、その後に起る……僕の罪も。

『行くぞ、テュランダル！』

「クロノ……さん」

『今ならいけるはずだよ。三人とも！頑張れ！』

「この声って……」

僕は辺りを見渡す。そして、なのとはやてと……

「フヒイト……」

金色の長い髪に黒いバリアジャケットを身にまとった女の子、フヒイトがそこにいた。

「…………」

しばらくその姿を見た後、僕は見た。

「…………僕だ」

八年前の僕の姿。
さつきと比べると、多少は成長してるかな?でも僕って童顔だから割と変わらないかも…………うつ、自分で言つてちょっと自己嫌悪。

『全力全開—スターーライト……』

なのはが、

『雷光一閃! プラズマザンパー……』

フロイトが、

『ごめんな……おやすみな』

はやてが、そして……

『今、助けてあげるね』

僕が、魔法を放つ準備をする。

『響け、終焉の笛ラグナロク! ! !』

はやてが叫んだ瞬間、彼女の前に巨大な魔法陣が展開される。三
角形型の魔法陣は頂点となる三つの部分に魔力が集まつていって、
そして……

『『『ブレイカアアアアアアア
！――！――』』

声を合わせて、三人一緒に魔法を放つ。

凄まじい轟音と共に放たれた三つの光は、化け物に衝突する。そ
の威力はきっと僕なんかが間に入つて行つても一瞬で消される程の
力を持つていたに違いない。

三つの光が炸裂し、大きな爆発音と一緒に天に伸びていく巨大な
炎。化け物の身体がなくなつた瞬間を……

『本体コア、露出……捕まえ、た！』

「シャマル……」

金色の髪の女性、シャマルがクラール・ヴィントを使って、コアを
捕獲する。

さあ、ここからが僕の出番だ……悲しい闇の書が、眠る時……

『行け、吉井！――』

『うん！――』

「シグナム……」

ピンク色のポーテールの女性、シグナムの言葉と同時に空を滑
空する九歳の僕。

『アに向かって、空を一直線に飛ひながら軽く足を開き、腰を落とし、右手で握る刀は左の腰へ、左手はその鯉口に添える。僕の刀型のデバイス、フォルトの…『鎮魂一閃』の構えだ。途中で僕に向かってくる攻撃を全てなのは達が空中で迎撃していくた。

今まで辛かつた闇を…悲しみを、僕が…ううん、僕達が…

剣が、
閃く。

『終わらせる……！』

そして、僕は、化け物のコアを切り裂いた。

周りが一気に静まり返る。

誰もが自分の時間が止まったような感覚になる。当然、今までの流れを見ていた僕も同じような感覚に陥っていた。

パキン！

やがて時は動き出す。

先ほど立てた音と共に化け物が巨大な爆発を起こし、その姿を消していった。

「あの時は死ぬかと思つたなあ……」

苦笑を浮かべる僕。

あの爆発の中、僕は思いっきり吹っ飛ばされ、そのまま……

ガツン！

『んじつー』

『ぶづつー』

爆発の余波を受けた僕は、そのままヴィータに向かって飛んでいつて、ヴィータに激突するつて言つクライマックスには似合わないオチを作つてしまつたんだっけ。

あつ、ヴィータがアイゼンを振り回しながら僕を追いかける……ははつ、懐かしいなあ……いや、あの時は本当に死ぬかと思つたんだけどね。

周りのみんながそれを見て笑つている。

うん、とても幸せそうな笑顔だ……これが本当のハッピーエンドだよね。

でも

『夜天の魔導書本体の……破壊?』

幸せな時は終わる。

『吉井明久……君の魔法なら、完全に消す事が出来る』

『彼女、リンフォースの介錯を……してくれ……』

悲しい離別によつて……

雪が降る中、一人たたずむ銀髪の少女…

『ねえ、本当にこれしかなかつたの?』

涙が流れそうなのを必死にこらえている…トバイスを握り締める
僕。

『ああ』

『なんで、なんで僕なの……?』

辛そうに顔を歪めながらリインフォースに尋ねる僕。周りでは涙
を流しそうになっているのは達がいた。多分、これから僕がやろ
うとしている事が、解っているからだ。

『お前だから頼みたいのだ。お前達のおかげで、私は主はやての言
葉を聞くことができた。主はやてを喰い殺さずに済み、騎士達を生
かす事が出来た。それに…主はやてが信頼を置いていたお前だ。私
は、お前の手で最後の幕を降ろしたい』

『……………』

「……………」

僕は、うつん。僕らは悔しくて歯を強く食いしばった。

悔しくて、悲しくて、寂しくて、色々な感情が交じり合って目の前がグルグルとうねるよつこ回り続けるよつな、そんな苦しい感覚が僕を襲つた。

『はやでちゃんとお別れしなくて、いいんですか?』

『……主はやでを悲しませたくないのだ』

『リンフォース……』

フエイトが悲しそうに呟いた。

彼女は母親を、愛した人を目の前で亡くしている。その辛さがどれだけのものか知っているからこそ、目の前でリンフォースが言った『悲しませたくない』っていう言葉が、どれだけ悲しくて、酷くて……そして……どれだけ優しいものなのか、解るから。

終わりの時は近づいてくる。

『そろそろ始めようか?夜天の魔導書の終焉だ』

『じめんなさい、リンフォース……』

『それはじつらの台詞だ……まだ主と同じ年の者に、辛いものを背負わせてすまない……』

シャマルがデバイスを使って、リンフォースのリンクコードを抽出させる。

優しく、労わるよつこ、安らかに彼女が逝くために……
でも僕にとって、うつうど。その時間はきっと誰もが辛くて悲しい

時間だったと思う。その中で、僕は必死に両目に涙を蓄えながらも体を震わせながら必死に待っていた。

そして、リンフォースの胸に一点の光が灯された時だった……

『リンフォース！みんなあーーー！』

リンフォースの、彼女の名前を叫びながら車椅子を漕ぎながら必死に僕らの元へとやって来る優しい女の子、はやて……リンフォースの、マスター……

『あかん、やめてーーー！』 リンフォース、やめてーーー！ 破壊なんかせんでもええーーー！ 私がちゃんと抑えるーーー！ こんなんせんでええーーー！ アキ君も、こんなんせんでええからーーー！』

『はやて……』

『ごめん、はやて……』

あの時、はやてにはその言葉が言えなかつた。幼いながらもバカな僕でも、これだけはどうしようもないんだ、ってちゃんと解つてたから……。

僕がやろうとしていることは、はやてから大切な家族を奪う事……絶対にはやてから恨まれる事だ。それが怖くて……とっても怖くて、悲痛な叫びを上げ続けるはやての顔を見ることが出来なかつた。

『主ははやて、良いのですよ』

『良い事ない、良いことなんかなんもあらへんーーー！』

『随分と永い時を生きてきましたが…最後の最後で、私は貴女に綺麗な名前と心を頂きました。騎士達もあなたの傍に居ます。何も心配は要りません』

『心配なんて、そんなん……』

「はやて…」

悲痛な叫びを上げ続けるはやてに、僕は両目から涙が溢れるのを抑える事は出来なかつた。でも九歳だった頃の僕はそれを必死に堪えていた。皮肉だなあ…全部終わつた後に、涙を流せるなんて…

『ですから…私は笑つて避けます』

『話し聞かん子は嫌いや…！マスターは私や…！話聞いて…！私がきつとなんとかする…！暴走なんてさせへんつて、約束したやんか…』

『その約束は、もう立派に守つて頂きました…』

『リインフォース…！』

『主の危険を払い、主を守るのが魔導の器の務め。あなたを守る為の…最も優れたやり方を私に選ばせてください』

『せやけど…ずっと悲しい想いをしてきて…』

『やつと…やつと…救われたんやないか…！』

『私の意志は…貴女の魔導と騎士達の魂に残ります…私はいつも貴

女の傍に居ます』

『そんなんぢや「いやりー。そんなんぢや「いやりー。リインフォース！..』

『うだよ…はやは、いつら。誰だつてこんな悲しい結末なんて
望んでいない。』

『はやてがずっと抱いてきた幸せは、みんなが笑つて過ぐせる未来。
それなのに、それなのにリインフォースがそこにはないなんて、ダメ
だよ。おかしいよ！..』

『駄々っ子はご友人に嫌われます。聞き分けを…我が主』

『リインフォース！..!..!..!..』

『はやはリインフォースに近づいて車椅子を漕ぐ。けれど車輪
が雪で隠れていた石にぶつかって、はやは雪の上に身体を投げ出
されてしまった。』

『なんでや…？これから…やつと始まるのに…これからいつら
と、幸せにしてあげなあかんのに…！..!..!..』

『雪の上で泣きじゃくるはやは、見てられなくなつた小さい僕は
シャマルに懇願する。』

『お願いシャマル！一回止めて！..』

『……はい』

『リンクアコアの抽出が止まつたリインフォースは、はやはの元へ
と歩み寄り、しゃがみ込んで優しくはやはの頬に手を添えた。』

『大丈夫です。私はもう世界で一番幸福な魔導書ですから』

『リンフォース……』

そして彼女は、あるお願いをはやてに言つ。

『主はやて、一つお願ひが

』
.....

『私が消えて……小さく無力な欠片へと変わります……もし良ければ、私の名はその欠片ではなく、貴女がいすれ手にするであろう新たな魔導の器に送つてあげてくれますか？

祝福の風、リンフォース……私の魂はきっと、その子に宿ります』

『リンフォース……』

『はい、我が主

最後にリンフォースははやてに笑顔を見せる。

その笑顔は、僕が今まで見てきたどの笑顔よりも優しい、慈愛に満ちた笑顔だった。

『シャマル……』

『……はい』

再びリンクアの抽出が始まると、そして僕はゆっくりとリンクフォースに歩み寄っていく。

『「ひへ、ひべへ……』

その顔は、もうボロボロだった。小さいながらも、男の意地で我慢じよりとしていたけど……どうしても耐え切れなかつた。涙が止めどなく溢れて、鼻水でぐしゃぐしゃな顔だつた。

『本当にすまない、吉井明久……』

『あへ、謝る事じや、ないよ……』

嗚咽交じりで、僕はリンゴフォースに応える。

『だが私は優しくお前にこれから酷な事を……』

『優しく、なんで、ない……なのは、フヨイトヤ、はやての方が、
ずつビ……す、つビ……』

『アキ君……』

『明久……』

『アキ君……』

涙と鼻水を袖で拭うと、僕はキッと田の前のリンゴフォースを見据えた。

僕のその姿を見たリィンフォースは、そのままはやて達のことを一瞥して……最期の言葉を告げた。

『主はやて……守護騎士達、それから勇敢なる者達……ありがとう、

そして… わよつなり』

『~~~~~つ…………』

剣を、一閃。
目を閉じて、リインフォースのリンカーコアを僕は「」の手で、切り裂いた。

直後。

パーン！

その音と共にリンカーコアは破壊され、そしてゆうくつと彼女の身体は光となつて天へと昇つて行つた。

「……夢？」

ゆうくつと僕は起き上がる。

時計を見ると、まだ夜中の一時だつた。まだ眠る余裕がある時間だけど、今はそんな気分にはなれなかつた。

ベッドから下り、自分の机に立てかけている一枚の写真を手に取る。

そこに写つてるのは、僕を中心になのは、はやて、アルフ、アリサ、すずか、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、ユーノ、クロノさん、リンクティさん、恭也さん、忍さん、美由希さん、桃子さん、士郎さん……そして。

「フュイト……」

あの日、フレシアさんが亡くなつた日……フュイトとフレシアさんの間に亀裂が入り、フレシアさんはそのまま虚数空間に落ちそつになつた。

あの時、虚数空間に落ちそつになつたフレシアさんの手を、二人の近くで見守つていた僕は無我夢中で掴んだんだけど……最期、彼女は僕にこうつてから僕に雷をぶつけて突き飛ばした。

『フュイトを、よろしくね』

八年経つた今でも、僕はその言葉を覚えている。
覚えているんだけど……

「その相手と八年も会つてないんじゃなあ……」

元々僕は海鳴市に住んでた人間じゃない。

『P・T事件』の時は管理局から逃げるために必死にデバイスを使つてどこへともなく飛んでいつて偶然たどり着いただけだし、『闇の書事件』では、なのは達と合流した後、ヴィータ達との戦いが始まつて、僕はクロノさんに必死に勉強を教わつたり、訓練されたりで、彼女達とともに過ごせた事つて……クリスマスの日以外、あまりないような気がする……その後はクロノさんに必死に管理局の一員となるために勉強ばっかり教えられたんだつけ……で、結局数年間フュイト達とは音信不通。

「…………はあ

会いたいなあ、みんなに……

窓から見た夜空……金色に輝く月が、僕にはフェイトの髪の色に見えた。

バカとデバイスと魔導師 ～バカが奏でる絆の曲～

これは、一人のバカな少年と優しい少女達の物語……

Prelude（後書き）

最初から重いですね……

ちなみに、内容をかなり端折っているのには理由があります。では、バカファンの方もあわせてよろしくお願ひします！

第一話（前書き）

いよいよ、明久の物語が始まります。

第一話

「はあ……」

ゆうくりと初夏になりつつあるこの季節、ダンボールと畳の教室で僕はダンボールを壊さないように配慮しながらもたれつつ、ため息をついていた。

「はあ……」

「どうした、明久。 わざからため息なんて吐いて？」

僕にそう話しかけてきたのは、たてがみのよつた髪に野性味が溢れた顔つきの悪友、坂本雄一だった。

「別に…… ただ、雄一はいいなあって思つてわ」

「あ？ 何がだ？」

「すぐ近くに幼馴染がいて」

「それは嫌みか？ お前はこの前の映画館で何を見てきたんだ！？」

雄一がなんか怒鳴りながら僕に近づいてくる。「こいつには霧島翔子さん、っていう雄一なんかには勿体無いくらい美人な幼馴染がいる……まあ、ちょっと激しい襲撃アプローチの数々で最近は少し戦慄を覚えてるぐらいなんだけどね……まあ、僕がしたかった話はそこじゃない。

「違うよ、そういう意味じゃないんだ」

「じゃあ、どう意味だよ？」

「……約束をすぐ」に果たせられるからだよ

「約束？」

「うん……」

八年前、フレシアさんと…そしてフェイトと交わしたもう一つの約束も僕は果たせていない。彼女をよろしく頼まれた僕は…その彼女を守つてあげるどころか、一言も話せていない。正直、もし彼女の居場所を教えてくれる人がいたらすぐにでも飛んでいくのに…

「明久…まさかお前にも幼馴染がいるのか？」

雄一が訝しげに僕に尋ねてきた。まあ、この前こいつに幼馴染がいたからという理由で襲撃をかけたんだけど…あの時は美人の霧島がつて言つ理由より、雄一なんかに幼馴染がいた、つていう方向に腹が立つたんだよなあ……まあ、今となつてはどうでもいいか。

「うん…つて言つても小学二年の冬から余つて背骨が捩れて内臓が圧迫されるううう

ツツツ……」

ぐおおーーなんだー？急に背骨を雑巾のよつに絞られるような関節技をかけられたぞー？」「んな技、管理局の士官学校でも習わなかつたぞ！？

「アーキー、ちょーーーと話を聞かせてもらひえるかしら？」

「み、美波、顔が怖いよ？」

いつものツリ田が、今日は猛獸のよつた獰猛さを含むよつた鋭い光が宿っている。いつものポーネテールがまるで角のようだ。

「いいから答えなさい、誰なの？いつたい誰なのよーー！」

な、なんかいつもよりも殺気が一割増していくような気が
つて、だらっしゃああああーーー！

とつさに美波を突き飛ばし、僕は横に飛んだ。すると先ほどまで僕がいた場所にカッターが数本、畳に深く突き刺さった。何！？力ツターッ投げナイフみたいにあそこまで突き刺さるつけ！？いつの間にか僕の周りはFFF団スタイルになつたクラスメイトに囲まれていた。

『吉井、貴様どうこうことだ！？』

『なんでお前みたいな奴まで幼馴染がいるんだ！？』

『くそお、坂本だけでも腹立たしいといつのこなぜ吉井まで……』

クラスのあちこちから聞こえる呪詛のような声。

この殺氣、ある意味怒ったヴィータに匹敵するのかもしれない。だがここは一先ず話し合いからしよう。争いは何も生まないからね。

「みんな、落ち着くんだ！僕は小三の冬の時以来『彼女達』とは出会つてないんだ！！」

『『『殺せえ！…………』』』

しまつた！逆効果だつた！！

「ア～キい？その『彼女達』とは誰のことなのかなしらあ？」

美波が猛獸のような鋭さを瞳に宿して僕ににじり寄つてくれる。

「吉井君… 詳しく教えてくれませんか？」

さらにその隣では田に瘴氣でも宿しているんじゃないのか、つて思えるこのFクラスの紅一点の姫路瑞希さんが僕にゆっくりと近づいてきていた。どうやら彼女もすっかりFクラスという空間に馴染んでいるみたいだ。

「（フォルト、なんとかならないの…？）」

僕の首にかけられているネックレス型のデバイス、フォルトに念話で語りかける。

『（そう申されましても……明久様はこの方たちに魔法を使えますか？）』

頭の中に優しげな女の人の声が響いてくる。魔法を使えるかどうかだと？そんなの決まってるよ。

「（姫路さんや美波以外にだつたら使える）」

「…（いつらに情けなんて必要ない。僕の魔法で虚数空間までぶつ飛ばしてやる。）

『（ダメですよ、一般人にはできる限り我々の存在を知られてはい

けないんですから！－！」』

フォルトが焦ったような口調で僕の頭に語りかけてくる。ぐう、
こういう時ほど規律というものが鬱陶しい！！

ともかく、魔法はそういう理由で使えないから…ここは……

「戦略的撤退！－！」

荷物を引っ掴んで教室から飛び出す僕…だったんだけど、突然襟首を掴まれる。

「ぐえ！」

「…」、呼吸が…襟首が絞まつたことによって、僕の首が圧迫された。

くそぅ、誰だ！？こうなつたら真っ向から戦つてやる！管理局でそれなりに鍛えられた肉体をここで披露

「吉井、どこに行く気だ？」

「げつ、鉄人！」

「誰が鉄人だ、バ力者！」

僕を捕まえた人物は、最悪な事に補習室の鬼、西村先生こと鉄人
だった。

「離してください、鉄人！このままじゃ僕の命が風前の灯のような
状況に陥るのは火を見るよりも明らかなんです！－！」

「そんな」とばたつでもここ

あつさりとそう告げる担任に、僕は現在の教育制度はどんな風になつてゐるか気になつた。

「それよりも授業が始まるタイミングで鞄を持って脱走とはいって
胸だな」

「違いますって！僕はただ

「調度良い、新しい補習を考え付いたところだ。お前をそれの実験台にしよう」

「お願いですから人の話を聞いてください！！」というより、生徒を
サラリと実験台にしようだなんてどんな教
」

そこまで言った瞬間、僕は鉄人に連れて行かれた。

卷之三

『あいつ、今日はもう出でこれないかもな』

ちつゝ、処刑は明日に持ち越しか

『代わりに坂本を処刑するとしよう』

『何よ、アキのバカ。今なら素直に言つだけで腕の関節だけで済ませようと思つたのに』

『そうですね、まったく吉井君の方こそ人の話をちゃんと聞かなければダメですよね』

『お主らがそれでは、たしかに逃げ出すのも解る気がするぞい……』

…』

僕が連れ去られた後、そんな会話があつたのは僕の知る由もなかつた。

「うう、酷い目に会つた」

夕焼け空の下、フラフラと頼りない足取りで歩く僕。今日は訓練校に行くのは無理かなあ。

僕はこうみえても、リンディさんやクロノさんの下で管理局の一員として日々、働きながら学んでいる。クロノさんが僕に魔力の練り方や扱い方を教えてくれたり、捜査官として必要な事はなんとかを色々教えてくれたりとかで、結構多忙な毎日を送つてたりする。ちなみに、この事を姉さんや母さん達は知らない。

なんというか、ちゃんと説明しても『あんた頭大丈夫？一回力ち割つた方がいいんじゃない？』なんていう反応が返つてくるだろうし…というか、そうハツキリ言われちゃつたし……まったく、少しは士郎さん達を見習つて欲しいものだ。あれこそ親の鑑というに相応しい人たちだよ。

『明久様、明久様』

「ん？ ビジしたの、フォルト？」

『クロノ様より通信が入っております。すぐに出てください』

「えつー？ マジ！ ？？」

マナーモードだったから気付かなかつた！ 慌てて僕は携帯電話を取り出すと、そこには確かにクロノさんの別称である『ＫＹ』の文字が出ていた。通話ボタンを押して、電話に出る僕。

「はい、もしもし」

『吉井、何分待たせるつもりだ』

「すみません… マナーモードにしてたので気付きました」

歩きながら僕は路地裏に場所を移動する。僕は一応、秘密のヒュンタ。一般人を巻き込まないよう配慮するため、出来る限り管理局からかかるくる通信は、人目につかないようにする必要があるんだ。

「それで… ひょっとしてこつものやつですか？」

『そうだ。場所はメールで記しておくからすぐに迎え

「了解！」

電話を切ると、五秒もしないうちにメールが来る。僕はメールを確認すると、デバイスを手に取り、走り出す。

「フォルト！」

『set up』

瞬間、僕の身体が紅色の光に包まれる。

その後、僕の格好が文月学園指定制服から、黒い服装に赤いスカラフを巻いた僕専用のバリアジャケットに変化する。刀型のアームズデバイスになつたフォルトを手にすると、僕は目的の場所まで一気に飛んでいった。

「（…郊外の廃病院、か……）」

すっかり日が暮れた中、結界を張つた僕は廃病院の中を歩いていた。

「（なんか『あいつら』が現れる場所ってバラバラだよなあ……）」

周りを警戒しながら僕は『あいつら』が出現する法則性を考えてみる。

『あいつら』が出てくるのは街中だったり、この廃病院のような郊外だったり、てんでバラバラ。だけど必ず『あいつら』が出てくるのはこういった人気の無い場所に限定される。それが人の手によるものなのか、それとも偶然…いや、これが偶然なはずはない。必ず何らかの必然性があるはず……けれど手がかりになるものが今のところないんだよなあ。

『マスター、そのまま行きますと…』

「えっ？（『スッ…）んぎゃあ…』」

『壁にぶつかります…て、もう遅いみたいですね』

は、早めに言つてよ……。

『それにしても本当にマスターは推理の時だけには忍りしこまでの集中力を發揮しますね』

「だけは余計だよ……だけは」

鼻を押さえながら僕は周りを見渡す。なんかいつの間にか別のフロアに移動してたみたいだ…はあ、クロノさんにも言われたけど、僕ってこういう時になんで周りが見えなくなっちゃうんだろ？ため息を吐きながら自分のいる場所を確認しようとしたとき、僕の田にあるものが飛び込んできた。

「これは…つー」

田の前に拡がる。赤、赤、赤。

触れてみると、少し乾いてはいるけれど手にこびり付いた。赤い、液体。血だ。若干乾いている白い固形物と赤い固形物…つまり、骨と肉だ。

吐き気をこらえながら、近くに落ちている血がこびり付いたタバコを拾い上げる。

「街の不良の溜まり場…だったみたいだね」

『やつですね…おやじへ偶然現れたあいつら』

「へやー。」

血が付いたタバコを投げ捨て、僕は歯を思いつきついてい縛る。何度もあいつらと戦ってきたのに、僕がもつと早くあいつの足取りをつかめていれば……！

『マスター、自分を責めへはいけません』

「でも、僕がもつとやかんと……。」

『苦虫を噛み潰しているのはあなただけではあります』

「えつ？」

『おそらく管理局でも対策が練られているはずです。仲間をもてば、この事件、必ず解決できるかと』

「…………うそ」

フォルトに諭され、僕はよしやく落ち着きを取り戻した。そうだ、今はこんなところで悔しがってる場合じゃない。悔しかつたら動け、そして事件を解決するんだ！！

でもできるなら、応援に駆けつけてくれる仲間が彼女達だと嬉しいんだけどなあ……

……なんてぼやいてもしょうがない、か。

「今は……ここにいる人たちの仇は取るよ

僕の目の前に群がつてくるように集まつてくる『あいつら』。黒い闇もやのような巨大な物体が目の前に現れる。赤い光が目のよう

に灯り、その下にぞろつと生え揃つた牙。

「いづらの名前は、エネミー。

クロノさん、曰く便宜上の意味でこの名前が付けられた名前だ。

「やるよ、フォルト！…！」

『yes - si!』

瞬間、僕はダンと床を蹴り上げて一気にエネミーとの間合いを詰める。左手で持っているデバイスの柄に右手を添え、エネミーの間に合いに入つてた瞬間、僕は一気に抜刀する。

ザン！

音と共に刃をエネミーの靄のような身体を斬る。

確かに手ごたえと共に、エネミーの切り裂かれた場所から、黒い液体が血のように噴き出す。

オオオオオン

エネミーが一声鳴くと同時に、本来ある頭の場所から、無数の触手を僕目掛けて放つて来る。僕は『ミツドチルダ式』の魔法陣を開させると、意識を集中させて一気に奴の触手目掛けて魔法を放つた。

「クリムゾン・バスター！…！」

発動させると同時に、紅い魔力弾が触手に向かつて飛んで行き、炸裂する。だけどそれだけで全ての触手を撃ち落せなかつたみたい

だ。何本か僕に向かつて襲い掛かつてくる。その先端は槍を思わせるように鋭く、それを僕の体に突き刺そうという魂胆なんだろうけど……

「そりは問屋が卸さない！」

僕の目の前に三角形の魔法陣…つまり『ベルカ式』の魔法陣が展開される。

本来ベルカとミツドの魔法は相容れない。それなのに、僕はその二つを使いこなす事ができる……これには一応、僕の中にある『アレ』が関係しているんだろうけど、今は関係ないかな。

刀の鯉口を指で少し押すと、鞘の中から紅い閃光が周囲の闇を切り裂くように輝いた。

そのまま僕は一気に駆け出し、エネミーの間合いに踏み込むと同時に剣を閃かす。

「けんきょううそうせん 剣響奏閃・八刃の舞」

チン、という音が病院の廊下に響く。

同時にエネミーが全身から黒い血を噴き出して倒れた。

これが僕の魔法。音速を超える居合いで繰り出し、鞘に刃が納まつたときには既に相手は斬られている。それも一太刀だけじゃなく、それ違った瞬間に僕はあいつを八回切り裂いた。だから八刃、ってね。

「ふう、まずは一体」

おそらくエネミーはこいつ一体だけではないだろう。最初僕が対峙したときは一体だけだったけど、徐々にその数を増やしていくって最近では二十体近くも見かけるようになった。

「（今回も骨が折れそうだなあ……）」

ため息を吐いてその場を立ち去りうつした時だった。

『マスター後ろからエネミーが……』

「なつ！」

慌てて後ろを振り向くと、そこには先ほどと同じ、黒い靄のような塊が集まっていた。しまった！まさかこの場にもう一体いたなんて！！

ダメージを予想し、ギリッと歯を食いしばって鞘を前に構える防御の構えを取った瞬間だった。

「トライデントスマッシュヤー！……！」

「ゴツー…といづ音と共に、エネミーの身体が二叉の金色の閃光に貫かれた。

金色の…閃光…もしかして…

「大丈夫？」

「……」

ゆつくりと、振り返る。

金色の長い髪をなびかせ、紅い瞳に桜色のくちびるが華やかに彩られた顔立ち。年不相応だけど、嫌味に見えない見事なスタイルの

体を黒いバリアジャケットに身を包んだ同じ年くらいの……綺麗に成長した……

「フハイト……」

第一話（後書き）

一応、明久とフェイント達は同じ年という設定です。
今回は明久がベルカとミッドの両方の魔法を使いましたが、その理由はあとで解かります。

第一話（前書き）

なのは組と合流！さらに一人ほどバカテス側から加わります。

第一話

夢でも見ているんじゃないのか？

最初はそう思つた。

でも違う。

「明久」

僕の名前を、彼女が呟く。

透き通るかのような綺麗な言葉が大気を伝わつて僕の元へと響いてきて、それが現実だと教えてくれる。

「フェイト」

僕が彼女の名前を呟いた瞬間、彼女は宝石のように煌めく紅い瞳に涙を浮かべ、僕に向かつて駆け出し、僕の身体に腕を回して抱きついてきた。

「明久あ！明久あ！！」

僕の胸で泣きじゃくる彼女。

ずっと

ずっと逢いたかった。

八年前、僕を管理局から匿つてくれた女の子。

八年前、僕と一緒にじぱりへ一緒に暮らした女の子。

八年前…僕が初めて守つてあげたいと想つた女の子……。

「フェイト……」

抱きついてくる彼女の体を僕はそつと抱きしめる。やつと出合えた。

嘘じやない、幻でもない。夢でもない。

僕の腕の中にいるこの温もりが、現実のものだと証明していた。一秒という時間がとてつもなく長いよつた感覚が僕達を包み込む。濃密な時間に身を任せ、僕とフェイトは互いに触れ合『ドゴオオオオオオオン！…』って何！？

突然響いた轟音に、僕らはバッと互いに体を離し、辺りを警戒する。

するとビニからか、懐かしい声が聞こえてきた。幼い、勇ましい女の子の声が……この声って！？

「ひょっとして…ヴィータ！？」

建物を豪快に壊す破壊音と共に『どりやああああ…』という声が続いていた。間違いない、こんな事をするのはヴィータだけだ！まさか彼女まで來てるなんて…！

「ヴィータだけじゃないよ……」

「『リ、ヒフェイトはイタズラっぽく微笑むと、告げた。

「なのはにアルフ…はやでやシグナム、シャマルにザフィーラも…」

みんなが明久のために来てくれたんだよ

「みんなが……」

その言葉に目頭が熱くなつた。
僕のために、みんながこの町に来てくれた……そつ考えるだけで
熱い何かが僕の中で駆け巡る。

「行こう、フヨイト……みんなのところへーーー。」

「うん！」

僕達は駆け出した。
なかま
戦友が待つ戦場へ

「みん　　『『アキ君ーーー』』　『明久ああああああああーーー』
ぐべりーーー！」

突然僕の元に涙を浮かべた茶色の髪を一つに結つた女の子と、同じ色の髪にショートヘアの女の子、そして身長が低く、赤髪で口元リのような服を着た女の子が僕に向かつて突撃してきた。ぐお
み、みぞおちに…け、結構強烈……だ……

「アキ君、久しぶり！」

「久しぶりやな、アキ君ーーー！」

「たまには連絡よ」せよな！久しぶりだな、明久！！

「なのは、はやて…ヴィータ！」

八年前よりも成長した（ヴィータはそのまんまだけど…）三人に出会い、僕は懐かしさと共に嬉しさが込み上げてくる……………といふか。

「はやて…歩けるよくなつたんだねーー！」

「せやーもつ体もぱっちり元気やでーー！」

病弱で歩けず、車椅子の生活だったはやて…彼女が今、当たり前のように元気な姿で僕の前に立っている。夢なんかじゃない、紛れも無い現実だ。こんなに嬉しいことなんてない。

「吉井、久しぶりだな」

「ふふつ、お元気そうでなによりです」

「シグナム、シャマル！！」

ピンク色のボーテールを持った凜々しい顔立ちの女性、シグナム。その隣にいるのは優しそうな笑顔を浮かべた金色の髪を持つた女性、シャマル。

「久しぶり、明久！」

「無事で何よりだ」

「アルフ……ザフィーラ……」

獣耳の少女…フェイトの使い魔の狼、アルフにはやての家族であり、守護獣の青い狼、ザフィーラがそこにいた。

「みんな……」

懐かしい仲間たちに囲まれ、僕は不覚にも泣きそうになつた。こんなに温かな気持ちになつたのは久しぶりだ……

「なーに、泣きたくな顔になつてんだよ

ヴィータが僕のわき腹を肘で軽く突付いてくる。僕はそれに苦笑を浮かべながら応えた。

「いや……みんなこまた会えて嬉しくて、や」

「アキ君……」

僕の言葉になのはが嬉しそうに笑顔を浮かべる。

久しぶりの再会。僕達は懐かしさと喜びが優しく包み込んでくれる空間を、じばじの間楽しんだ。

「……で、これついでないことへ。」

場所は変わっここは僕の家。

とりあえずあの廃病院にいたエネミーは、全部なのは達が倒したみたいで、結界を解除した僕らは一旦僕の家に集まることになった。一人暮らしにしてはかなり広いリビングだけど、僕も入れて九人（内一人は狼）にもなれば結構せまく感じるものだ。

「どういひとつて？」

フェイトがソファーに座りながら、僕が淹れたコーヒーを飲みながら聞いてくる。

どうやら僕の意図を伝えずに聞いてしまったみたいだ。いけないいけない、ちゃんと相手に理解できるように話さないと……

「えつと…順を追つて話すけど、とりあえず最初に何でこの街にフェイト達がいるの？」

「ああ、そのこと…母さんがね、『明久一人では荷が重いだろうから』っていう理由で、私達をこの街に派遣してくれたんだ」

「なるほど…確かにフェイト達なら僕と戦闘経験があるし、助つ人としてはこれ以上頼りになる存在はないね」

「こやはは、なんか照れるね」

「事実だよ…でもそうなると危惧していた可能性が出てくるな……」

ため息を吐きながら僕はコーヒーを啜る。今の気分を表したかのように、少し苦みが強い味だった。

「危惧していた可能性とはなんだ、吉井？」

「うん…去年からこの辺りにエネミーが出始めた…っていうのは聞いてるよね?」

その言葉になのは達は頷く。

去年…僕が文月学園に入学する少し前からエネミーがこの街に出現し始めた。

管理局から頼まれた『もう一つ』の任務に加え、僕はクロノさんの下でエネミーの討伐と調査を任せられた。このもう一つの任務についても、なのは達は知っていたみたいだ。

「僕が危惧していた可能性…それは現状が悪化の傾向を辿る事だよ

「悪化の傾向?」

「うん。エネミーの出現の数はここ最近、数をかなり増やしてきてる。前回、僕は一人で約二十体近くのエネミーを相手にしたんだ」「二十体も!…?」

「大丈夫だったの!…?」

「怪我、せえへんかつた?」

フロイトとなのはとはやてが不安そうに僕に尋ねてくる。三人の優しさに暖かなものを感じながら、僕は笑顔で大丈夫だったよ、と返す。

「それで、ちょっと質問なんだけどさ…なのは達って魔力ランクはどうぐらいい?」「

「私達？……Sランクだけビ、リミッターが付いてるよ」

「僕はSS・ランク。当然ながらリミッターは付いてるけどね」

僕のランクの高さに驚いたのか、なのは達は鳩が豆鉄砲をくらつたような顔になる。まあ、僕もこの歳でここまで自分の魔力ランクが高いなんて初めて聞いたときは驚いたけど……とりあえずその話題は置いておこう。

「それで、吉井。この質問の意味は何だ？」

ザフィーラが訝しげに尋ねてくる。

その問いに答える前に、僕はコーヒーを啜った。この次はかなり長めな説明になるだろうから、少しでも喉は潤しておかないと……

「質問の意味なんだけど……リミッター付きとはいえ、僕は一応ランクSオーバーの魔導師。そして今回、みんながここに駆けつけてくれた事で確信した。現状は確実に悪化の傾向を辿ってる……それも、ランクSオーバーの魔導師を一気にここまで戦力を加えないといけないくらいに……」

「なるほど……しかしそうなると、あまり悠長にしている暇は無さそうだな」

僕の言葉に全員が真剣そのものの顔つきになる。

事態は確実に悪くなっている方向に向かっている。しかし一向に証拠の一つも無く、手がかりも何一つ無いのが現状だ。

「だ、大丈夫だよ！これだけの数の仲間がいるんだよ？なんとかなるって！」

突然響き渡るアルフの声。それに続くかのように、ヴィータが口を開いた。

「そ、そりだな！あたしらが加わるんだ！鬼に金棒つてやつだ！！」

空元氣、と言つ訳でも無せそうだ。

一人の田には、本当に『なんとかなる』という強い意志があった。その強い意志を持った言葉は、僕達の心に強く響いた。

「そりだね、ヴィータちゃんの言つとおりだよー。」

「私も…みんながいれば大丈夫だと思つよーー。」

「せやな！それにこっちには前よりもずっと頼もしそうになつたアキ君がいるんやー！誰がこよつと負ける氣なんておきんーー！」

なのは、フュイト、はやての三人がまるで確信を持つたかのような力強い言葉を言い放つ。

「うん…僕もこの『九人』がいればどんな壁だつて乗り切れると思つーー。」

根拠も何も無い。けれど、堂々と宣言できる言葉。

そうだ、確かに状況は悪いものなのかもしれない。けれど、それでも僕の前にはこれだけの数の仲間がいるんだ。恐れる事なんて無い。みんなとなら、どんな状況でも乗り越えられるはずだ……

「いいえ、違うわよ、明久君」

「えつ？」

どうこい」と、シャマル？

「実はなんだけど…後一人、ここに加わるやつの」

「一人もー?」

えつ、マジで!?

あと一人も戦力が増えるなんて…でも、一人つて誰だろ? なんて考えていたときだつた。

ピンポーン

「誰だろ、宅配便かな?」

「私が出ようか?」

そう言つてフェイトがソファーから腰を上げる。けど、仮にもこのは僕の家。お密さん! そんな事はさせられないと。

「いや、僕が出るよ。とつあえず適当にくつひこでて

そう言つと、僕は玄関に足を運んだ。

さてと、誰が来たのかな? 知り合いだつたら悪いけど帰つてもらおう。なんせ今は久々の仲間達との再会だ。できるなら水入らずにしてもらいたいし。そう思つていたら、またチャイムの音が鳴つた。

「はーい、どちら様ですかー?」

返事をしながら鍵を外し、ドアを開いた。

「よう、明久」

玄関に立っていたのは…僕の悪友、雄一だった。
バタン、ガチャガチャ（ドアを閉めて鍵をかけ、チエーンを付
けた音）

悪は去つた。それで、みんなのところに戻る。

シンドンード

てめえ、明久！いきなり閉めてんじやねえよ！…

「わるやこ、この野郎。せつかくの旧友との再会をお前なんかに汚されてたまるか。

『……雄一、吉井は出ないの？』

なんだ? 霧島さんまでいるのか?」こつめ、さては僕に見せつけようと……シ――

『あの野郎…つたく、指示された場所がこいつの家だと知ったときは度肝を抜いたぞ』

……私も驚いた、吉井も『デバイス』使えるなんて

——ガチャヤ——

「さ、霧島さん…今、なんて言ったの？」

聞き捨てなら無い単語に僕は冷や汗をかきながらドアを開けた。

頼む、聞き間違いであつて欲しい。

しかし現実というものは無情で……

「明久……マジでお前も『テバイス持つてるのか?』

「ゆ、雄一もなの……?」

互いに冷や汗をかきながら僕らは睨み合つ。

霧島さんはともかく、よりもよつてこいつが助つ人だなんて最悪だ。

「坂本雄一だ、よろしく頼む」

「……隣にいる坂本雄一の『妻』の霧島翔子」

「待て翔子、俺はそもそも容認していないぞー?」

「……大丈夫」

「な、何がだ?」

「……雄一とは小細工なしの腕力勝負で結婚してみせる」

「結婚に腕力は必要なぐおがああああああああーー!こめかみがーー!頭蓋が軋むウウウウウウーー!」

『　』
『　』
『　』
『　』
『　』
『　』
『　』
『　』
『　』
『　』

二人による、ある意味個性的で強烈な自己紹介に、僕の昔馴染みである彼女達は絶句していた。

雄一と霧島さんが増えて、さらに狭くなつたリビングで僕は一人に「コーヒーを淹れながらため息を吐いていた。

「明久、さつきからため息を吐いてるけど、どうしたの？」

横からフェイトが僕の顔を覗き込むように現れる。その時、髪からふわりといい香りが漂ってきて僕は少しだけ緊張してしまった。

「うん…ちょっとね」

まさかこんな身近に魔導師がいたなんて…それも雄一なんかがある意味、ちょっとショックでもあった。

「ねえ、あの一人つて明久の知り合い？」

「うん、ブサイクの方は雄一つて言つてね、一応は僕のクラスの代表」

「代表？」

フェイトが首をかしげる。

あーそつか…『代表』とか、そういうのは文月学園固有のものだつたつけ。まあ、詳しい説明は後にするよ、とフェイトに言つたら解つた、と言つてくれた。理解がある友達を持ってて僕も嬉しいよ。

「で、隣にいる美人の方は霧島翔子さん、雄一の幼馴染で、学年主席の人なんだ」

「学年主席つて……じゃあ、学生の中で一番成績が高い人なの！？」

「うん……まあ、少しくせがあるけど……」

「…………あー…………」

フロイトがなんとも言えない表情で雄一にアイアンクローラーを続けている霧島さんを見る。さつきまで自分で妻と言っていたのに、その夫である相手に情け容赦もなく頭蓋を潰そうとしている姿を見ればそう思うだろ？ 新学期の頃、才色兼備と噂されていた霧島さんの実態を知ったとき、僕は思わず絶句してしまったくらいだし。

「一人とも、そのへりこにして話を再開させよ！」

一人の前にコーヒーを置き、僕は話を再開させよ！ と促す。

「……吉井、まだ終わってない」

「『めんね、霧島さん。けど終わつたら好きなだけ雄一を好きに』していいから」

「ちょっと待て明久！ 僕の許可も無しにそんな」と

「……ありがと、吉井はいい人」

「どういたしまして」

「おお――――――――――――」

すまん、雄一。お前の犠牲は忘れない。それと、話を始めないと……。

「これから僕らの方針なんだけど……やつぱつHネリーが出てこない」と僕らは動きようが無いんだよね」

「…………まあ、やうだな」

雄一が疲れた顔で頷く。

「俺も何度もエネミーと戦つたことはあるが、あいつらがどうやって出現しているのか、手がかりすらない状況だと、俺らから起こせるアクションはねえからな」

「えっ？ 坂本君も戦つた事あるの？」

なのはが不思議そうな顔をして聞いてくる。

「ああ、どうも俺らはそれ違った場所で戦つていたみたいだな
……しかし解せねえな」

「何が？」

「そもそもだ、こんなに近くに魔導師がいるのに、なんで俺らは出会わなかつたんだ？」

「確かに……」

雄一の言つとおりだ。そもそもこれ程近くに魔導師がいたつていづのと、なぜ僕らは出会わなかつたんだ？ エネミーが出ているとは

「え、少なからず現場で鉢合せしてもおかしくは無いはずだ。
それが無いって言う事は…もしかしたひ。

「人為的な何かがある、どこか？」とやな

はやての言葉に僕らは頷く。

「……ちょっと、管理局に聞こ合わせてみる…少し、時間がかかる
かもしれないけど」

「頼むよ、霧島さん」

「じゃあ、結果が出るまでこの件は！」まことにしておひつ

「せうだね、少なくとも得られたもののはあつた訳だし」

「」のエネミー出現事件に人為的なものが関わっている、という可
能性が高まつただけなんだけど、それでも一歩踏み出す事が出来た。
それだけでも収穫だ。

「…にしておひつだ」

「ん？どうしたの、雄二？」

「いや、お前がこうやって小難しい会議にお前が普通に参加できて
る事に違和感があつてな」

失敬な。

「あのね、これでも捜査官としてクロノをとにかく鍛えられてき

たんだよ？まあ、ほぼ部屋に缶詰みたいに閉じ込められて勉強させられたり、僕だけ特別メニューだ、って言つてひたすらガジェットの相手を一人でしなきゃいけなかつたりで大変だつたけど……

『 』
『 』
『 』
『 』
『 』
『 』

僕の言葉にその場にいる全員が僕の方を見る。どうしたの？

「えっと… 明久はクロノに鍛えられてたんだよね？」

「うん。でもフェイト達のことはあまり聞いてなかつたな… 聞いても『そんな暇があつたら勉強してろ』って言われてさ… まあ、みんな頑張つてゐわけだし、僕も頑張らなきゃーと思って必死に勉強してたよ」

「明久… も前…」

「雄一がなんだか哀れみに満ちた視線を僕に向けてくる。何！？本当になんなの！？」

「えーっと、アキ君

なのはが苦笑いを浮かべながら僕に尋ねてきた。

「アキ君の両親つて、アキ君が魔法に関わってる事… 知つてるの？」

「ううん、知らないよ。教えても『はあ？ あんたついに頭壊れて幻覚でも見たんじゃないの？』って言われるのがオチというか、そう言われた… デバイスを開発させようとも思つたけど、無駄だらうと思つてやめたくらいだし」

『 』 』 』 』 』

みんなが同情の眼差しで僕をみつめる……お願い、僕をそんな目で見ないで……

「…………すまん、明久。お前も苦労してんんだな」

「解つてくれて嬉しいよ、雄一」

前にも聞いたけど、雄一も何だかんだで母親には苦労しているみたいだ。

「（そ、そつか……アキ君に八年間会えへんかった理由がなんとかわかつたわ……）」

「（うん……両親が知らないのを知つてて、クロノ君、わざとアキ君を私たちに……といつより、フロイトちゃんに会わせなかつたみたいだね）」

「（クロノ……後で母さんと一緒にHANASHIしないこと……）

「

その頃、リッジナルダとのある場所で……

ゾクリ……

「な、なんだ！？今、凄まじい寒気を感じたよつな…………」

果たしてクロノの運命はいかに？

次回に続かない…！（某禁書のノリで）

「さてと、とりあえずエネリーを感知したら必ず連絡しあつて近くにいるメンバーと合流する事。以上、解散！」

雄一が閉めの言葉を言い、そのまま立ち上がると、もの凄い速度で家を出て行った。その後に、霧島さんが『……逃がさない』と言つて雄一の後を追つていった。ならばだ、我が悪友よ。骨は拾つて『ハリの中に入れておいてやるわ。

「あと、それじゃあ私たちも帰らせてもらひわ」

「えつ？ 帰るって…？」

「実はな、この近くに私たち用にリンクトイさんが用意してくれた家があるんだや」

「そこで私たちは暮らすんだよ。ついでに、アキ君の学校に通う事になつたんだ」

「やうなのー？」

これは驚きだ。なのは達がこの街に住むのはなんとなく想像してたけど、まさか僕らが通つている学校と一緒に通う事になるなんて…なんていうか、とっても嬉しいや。リンクトイさんには感謝しな

いと。

「じゃあね、アキ君。また学校でな！」

「じゃあなー！」

「失礼しました」

「また会おう」

「また明日ね、アキ君、フェイトちゃん、アルフちゃん！」

口々にさう言つて玄関から出て行くのは達。

また、明日……か。

またなのは達から「Jの言葉を聞けるなんて……なんだか凄く感慨深い……ん?

あれ?なんか違和感が……

「あの……明久……」

背後から澄んだ声が響く。振り返ると、そこには……フェイトがいた。心なしか、その顔は少しだけ赤くなっている。その後ろではニヤニヤと笑っているアルフがいた……って、どうしたの?

「あれ?フェイト、どうしてここにいるの?みんなと一緒に帰ったんじゃないの?」

「えつ……あ、明久は何も聞いてないの?」

「何が？」

「私、今日から明久の家にホームステイする」とになつてゐるんだよ？」

「え？」

瞬間、僕は自分の時間が止まつたような感覚に陥つた。
え？今、彼女……なんて言つた？

「ほ、ホームステイつて……マジで？」

「う、うん……母さんがここに泊まつたら？って言つてね……一応、
明久の両親にも了承は得てるんだよ？聞いてない？」

「うん、全然」

母さんなら、息子の了承なんて知つたこいつちやないと思つて
いるだろうし、今更驚くことではない。

とこりか、リンクティさんは一体どうやって母さんに了承させたん
だろ？……管理局流の話術交渉で丸め込んだのかな？

「いや、交渉に『…………（とにかく凄まじい金額）』円払
う、って言つたらあいつひとつと了承してくれたみたいだよ」

「大人つて汚い！！」

アルフの言葉に僕は愕然とした。

「とにかく、よろしくお願ひします！！！」

「これから世話になるよ」

フロイトとアルフが笑顔で僕に話しかけてくる。これから彼女達と一緒に生活していくんだと思うと、八年前の時の事を思い出すな。

そう思つと、少しだけリンディさんには感謝したい気持ちが湧いてきた。まあ、裏で汚い大人の欲望を感じたりはしたけど……これから大変なことがたくさん起こるのは火を見るより明らかなんだけど……

「あー……うん。よろしく!」

とりあえず今は彼女達との輝かしい共同生活に胸を躍らせる」とこにした。

第一話（後書き）

フェイントと同棲……果たして、明久の運命は？

第三話（前書き）

同居生活が始まった次の日です。

そろそろ文月学園の清涼祭が近づいてきた今日この頃。僕、吉井明久の心臓は朝っぱらからドキドキしていた。

「…………なんだって、こんな早い時間に？」

田覚まし時計を見ると、まだ朝の五時だった。まだまだ余裕のある時間だけど、この高鳴り続ける心臓のせいで、一度寝は困難を極めていた。

「…………しようがない、起きてよ…………」

ため息を吐きながらベッドから降りる。

「さてと、何で時間を潰そうかな……そうだ、ゲームでもして……あつ」

そこまで呟いたところで気付いた。

そうだ…今、この家にいるのは僕だけじゃなかつたんだ……。

「フュイトとアルフが昨日から一緒に同居してるんだった……」

「う、昔馴染みが近くにいるせいで早く起きた、なんて子供じやないんだから恥ずかしいなあ…………うつ、考えるとまた心臓がドキドキしてきた。と、とりあえず冷たい水を顔にかけて、気分転換でもしよう。」

部屋を出て脱衣場にある洗面台に向かつ。

ふあ、とあくびをしながらドアを開けると…脱衣場に置かれてい

る籠の中に置んだ衣類とバスタオルがそこにあつた。

(あれ? なんでこんなとこね? つ---)

最悪な事態を想像し、僕は慌てて脱衣場から出よつとした……けど。

ガチャヤリ

「ふう」

僕が脱衣場を出る前に……長い金髪から零を落とし、全身に一糸すら纏っていないフェイトが浴場から出てきた。

.....

時が止まる。

だが次の瞬間には時が動き出していた。

近くにあつたバスタオルを手に持つて……

「アーリー」

僕の顔にバスタオルが飛んできて視界が奪われる。でもバスタオルだから別に痛くもなんともないや。フェイトみたいな美少女の裸を見てこの程度で済むなんて僕は運がいいほうなのだろうか…？いや、今はこんな事を考へている場合じゃない。

バスタオルが顔にかかっているせいで、視界は見えないけど、このまま後ろに下がってドアを閉めれば……

「ふえ、フエイトー?なんだい、今の悲鳴はー? (ドンー)

「つて、うわあー?」

突然響き渡るアルフの声と共に、背中を強く押された。急な事に対処できず、僕はそのまま思いつき前へ倒れて『むにゅん』ってなんだ?このやわらかくて温かくて、いい匂いのすべすべした……。

「あ、あう、あう

「あつ

「…………えーっと

「…………

「…………

三者三様の沈黙が脱衣場を支配する。

この後、僕はフエイトから思いつき平手打ちをもらい、まだ初夏だというのに頬に真っ赤な紅葉を作ることになり、脱衣場からアルフと一緒に追い出された。

…………朝っぱらから、色々と不幸だ。

「…………」

現在の時刻は七時四十分にさしかかるであろう、この時間。僕らは一応、学生（本職は時空管理局の魔導師）なので、この時間は学校に登校するのが常識だ。

爽やかな朝の澄んだ空気を肺一杯に吸い込む。「うーん、なんだか甘い香りがするなあ。

初夏の柔らかな日差しを浴びながら僕はこの早朝といつ時間を堪能していた。

「あ、あの……明久」

「ん? 何、フェイト?」

僕の隣には誰もが見目麗しい少女と称するのに相応しい美少女、フェイト・T・ハラオウンが少しだけ申し訳無そそうな顔になっていた。

ちなみに、僕はその顔をまっすぐには見れていなかつたりする。理由? 察してくれとしか言いつづが無いよ。

顔を見れば思い出されるのは、わずか数秒しか見ていないのに、しっかりと僕の記憶に焼きついて消す事ができない、というよりはほぼ永久保存でもしておきたいようなセクシーシーン。

この早朝という時間を堪能している理由は、その煩惱を少しでも晴らすための行動なのだ。

「その……朝は、『めん』

「あ……い、いやーそれを言うなら僕の方も謝らなきや……本当に『めん』まさかあんな朝早くにフェイトがシャワーを……」

「わっ、わあああああ！それ以上言わないで…！」

真っ赤になつたフロイトが、両手をブンブン振つてあわてる。
ちなみに、早朝の時間にフロイトがシャワーを浴びていた理由は、
どうも僕と同じらしく、朝早く目が覚めてしまい、中々寝付くこと
ができず、シャワーでも浴びてリフレッシュでもしようと思つたか
ららしい……そのシャワーが調度終わる頃に僕が入ってきたという
…なんて間が悪いんだろう、僕は。

う…なんかまたあの時の光景が脳裏に……って、イカんイカん！
！色即是空、空即是色！落ち着け僕、こんな朝早くから煩惱に目覚
めるな…！

自分の中で煩惱と戦いつつ、これ以上泥沼にならないように僕ら
はいったん深呼吸する。

「と、とつあえず…この話はこれで終わらじよつ」

「そ、そうだね…」

「それじゃあ、学校に行こつか

「うん」

フロイトが僕の隣に並んで歩き始める。

青空の下、美少女と一緒に登下校。

うーん、まさか僕がこんなギャルゲの主人公みたいなシチュエーシ
ョンを現実でするだなんて…人生、何が起こるか本当に解らないや。

ドキドキドキドキ

先ほどから心臓がやたら高鳴っている。

チラリと隣を見ると、そこには笑顔を浮かべながら文月学園の制服を着ながら登校するフェイト。そんな嬉しそうな笑顔を浮かべられながら隣を歩いてくれているというのは、男として幸せなことだ。でもこの心臓の高鳴りはそれとは少し種類が違うような気がする。一体なんなんだ？この胸の高鳴りは……ん？美少女…………一緒に登校…………雄一だった場合…………なるほど、解つたぞ。

「明久、なんか顔色が悪いけど……どうかしたの？」

「あー、うん。ちょっとね……でも別に具合が悪いって訳じゃないから大丈夫だよ」

「そう？でも明久のあの食生活を見たらその可能性もあるような気がしてきたんだけど……」

「うう……」

昨晚、フェイトに僕の食生活について聞かれたら、滅茶苦茶怒られたんだっけ……まあ、その後、一人一緒に近所のスーパーに買い物に行って、久しぶりにまともな食事を食べたっけ……それで、今日は久しぶりにお弁当を作ったんだ。フェイトの分と、僕の分。フェイトはなんだか悪い、と言っていたけど、食べててくれる人がいるのって、なんだか自分一人の分を作るよりもずっと楽しいんだよなあ……。

まあ、その話はいったん置いておこう。

「大丈夫だよ。これでも一時期、塩と砂糖を食べて過ごしていたからね

「食べるじゃなくて、舐めるが正しい表現のもので過いじてたの……？」とか、魔法の訓練のときほどひじったの…？」

「クロノさんからまかないを貰つてなんとか訓練を乗り越えてたら問題は無かつたよ？」

「ああ、そう……今度は私が明久の食事管理しないと（ボソッ）」

フュイトがなんか小声で呟いていたけど、スルーしよう。
さてと……そろそろ校門が見えてきたな……。そう考えるだけで僕の胸はさらに高鳴った。これから始まるであろう、僕の輝かしい青春に僕の胸が鼓動を奏でている理由の一つだ。
そしてもう一つ……こっちが大部分を占めていたりする。

『『『異端者発見！』』』

『ほら、来たよ。僕の胸の大部分を占めていた連中が。

「ちいいつー見つかってーーー！」

「えつー？ 明久、どうしたのーーー？」

僕はフュイトの手をつかむと、急いで走り出す。

『おのれ吉井！ 誰だ、その美少女はーーー』

『そんな美少女と一緒に登校など、許しておけん！』

『異端者には血の制裁を！』

『逃がすなあ！討ち取れえ！』

『我が軍の力を彼奴にみせるのだ――――――』

『首を取れ！取つたものには褒美（エロ本）を遣わす！――――』

『…………』

『…………』

『痛みを味わいながらじわじわと地獄に送つてくれる！』

『吉井明久を灰に！吉井明久を塵に！吉井明久殺しの紅十字！』

背筋が凍るような叫び声を上げながら様々な武器を持つて追いかけ
てくる。というか、途中の奴らは、僕を敵の総大将か何かにしてな
かつた？それと最後、君はルーンが刻まれたカードで炎を操る魔術
師か何かか？

「あ、明久！？あの覆面の人たちは何なの！？」

「フェイト、今は黙つて僕についてくれ！』

彼女の手を離さないようにしつかりと握り締め、僕は学園に入る。
フェイトは今日が転校初日な訳だし、文月学園に入つてから最初に
行くのは職員室のはず…職員室ならば奴らの手も届かない！なん
としても生き延びてやる！』

「はあ……はあ……」

「ぜえ、ぜえ……」

なんとか嫉妬に狂ったクラスメイトから逃げ延び、僕とフェイトは職員室の中に逃げ切る事が出来た。まだ朝早い時間だったから、それ程登校している生徒も少なかったのが幸いしたみたいだ。

「吉井、テススタロッサ、朝から騒々しいぞ」

さすがに騒ぎすぎたせいか、女の先生に注意されてしまった。

「あつ、すみませ……ん?」

「なんだ、人の顔をじろじろと……」

僕は目の前にいる、竹刀を片手に担いでいるピンク色のポーネルをした巨乳でジャージを着た昔馴染みの女性の姿に固まつた。

「……何やつてるの、シグナム?」

ヒュン！シユパツ！ シグナムが僕に向かつて竹刀を振るい、僕が白刃取りした音

受け止めた両手にもの凄い衝撃がきた。あ、危ない…危うく僕の脳天に突き落とされるところだった……って！

「いきなり何すんの、シグナム！？」

「先生と呼べ、吉井」

...はい？

「いや、戦いでは確かに先制はあるのみだけど」

「明久、それまったく違う『せんせい』だよ」

いや、今のはただの現実逃避なんだけど、まさかとは思うけど……

シグナムがこの学校の先生?」

「 そうだ、私は今日からお前のFクラスの副担任となつた。担当は体育と補習室だ。これからよろしく頼むぞ」

「あ、いこ………じめじめ………」

えっ！？シグナムが僕のクラスの副担任！？？しかも鉄人と同じ補習室担当！？？？

「しかし私の竹刀を受け止めるとはな……鍛錬は怠つていないようだ
な、吉井」

「あはは、まあね。みんなを守れるへりが強くなるために、結構鍛えてたから……じゃなくて……」

「吉井、朝から騒ぎますわだわ。一体どうした？」

不思議そうな顔で僕をみつめるシグナム。

いや、僕としてはこの場に貴女がいるほうが不思議で仕方ないんだけど……。

なぜここにシグナムがいるのか、その話を元に……って、そういう話すら始まつていなかつたんだつけ……なんて考えている途中、職員室のドアが開かれ、外から白衣を身に付けた金色のショートヘアーの女性が……つて……！

「あら、明久君。おはようございます」

「なんでシャマルまでここここののを

！――！」

「吉井、朝から喧しきぞ（ゴスツ）」

冷静さを取り戻したところに、再び度肝を抜くようなイベントが待っていたとは想像も付かなかつた。

そしていつの間にか背後に立つていた鉄人に頭を殴られた。

「なんでつて……はやてちゃんから何も聞いてないんですか？」

「え？いや、何も……」

僕の言葉に、シャマルだけでなく、シグナムとフロイトもどこか納得したよくな……あるいは、『ああ、またか』的な感じの雰囲気でため息を吐いていた。

「（あのね、私たちは管理局の権限でこの学校に教師としてこりの）

「

シャマルが僕に念話で語りかけてくる。

なるほど、管理局の権限……って、それって偽造免許なんじゃ……なんて言つてられないか。状況が状況だし。少しでも仲間を一箇所に集めさせておくのが目的なのか。

とりあえず、これでなんでこの場にシグナム達がいるのかは解つた。

「はあああああ…………」

解つたと同時に僕は深いため息を吐いた。

「失礼しまーす。今日からこの学校に転向してきた八神なんやけど……おつ、アキ君！」

「邪魔するだー……つて、どうしたんだ、明久。朝から疲れた顔してんなー」

ため息の元凶である昔馴染み、はやてが文用学園の制服を身に付けて職員室に入ってきた。隣には同じように文用学園の制服を着たヴィータがいた。なるほど、ヴィータはシグナム達と違つて背が足りないから、教師ではなく学生にしたのか……。

「どないしたん? 朝からえらい疲れた顔してるので、アキ君」

「はやて、ビューティシグナム達が学校にいるつて教えてくれなかつたの?」

「ん? ああ、そのことな

僕の言葉にはやでが一瞬だけ考え込むような仕草をした後、ニヤリとしてやつたり、と言つたよつた顔つきになる。まさか……。

「その方がおもしろいからに決まつてるやん~」

やつぱりか……はやで、前はあんなに優しい少女だつたのに……八年前とは違つ意味で成長していた昔馴染みに、僕はその場に頃垂れてため息を吐くしかできなかつた。

「これより、異端者・吉井明久の審問を行づ」

フロイト達と職員室で別れた後、教室に付いた途端、僕の周りには覆面とマントを身に付けたクラスメイトに囲まれる羽目になつた。しまつた!すっかりさつきの騒ぎでここにつらの事を失念していた!!

「罪状、吉井明久は今朝方、見田麗しき美少女と仲睦まじく登校していた…これに相違ないか」

『『『相違ありません』』』

「吉井明久、何か言い残す事は無いか?」

「なんで尋問の前に刑が下る直前の台詞が出るのー?」

前から思つてたけど、この審問会色々とすつ飛ばしそうだと思つ。

「判決、死『ちょっと待ちなさい』 む？」

助かつた！誰かは知らないけど僕に助け船を

「アキ、見田麗しき美少女つて誰なのかしら？」

「お話をうそく聞かせてくださいね」

そこにいたのは怒髪天をついている美波と、闇の書も真っ青なくらいの禍々しいオーラを身にまとった姫路さんだった。

どうやら僕に渡されたのは助け船じゃなくて天国行きの船らしい。

『姫路様、島田様、今は異端審問会の最中。どうかお引取り願いたい』

どうぞにいる貴族に仕える執事みたいに突然恭しくなる須川君。足元を見てみると、まるで地震でも起きているかのように震えている。周りを見れば彼だけでなく、他のメンバー全員が体を震わせていた。

ふつ、君達なんてまだいい方さ。

僕なんて、そのオーラを真正面から喰いついてるおかげで震えすらできない。

「ダメよ、今すぐアキを引き渡しなさい」

「そうですよ、私たちは明久君に話があるんですから… そうですよね、明久君？」

邪悪なオーラと大気が震えるほど殺氣を放っている姫路さんと美波。その後ろでは、僕が逃げ出さないように出入り口を押さえている

る異端審問会。……。

前門の美波と姫路さん、後門の異端審問会。

まぢー… どっちに向かっても僕の生き残れる道が無い。

ぐつ… こままでは… そうだ、異端審問会の注意を少しでも逸らすんだ。出入り口さえ確保できれば、あとは職員室にでも逃げ込めばいい… そうすれば、鉄人か… あるいはシグナムと一緒にこの教室に戻つてこられる。

考えはまとまった。後は行動するのみ。

「あつー！ 雄一が霧島さんと手をつなぎながら登校してくる…。」

『 『 『 何だと…？？？』 』 』

チャンス！

今のうちに職員室まで一気に駆け出し… そつ思つ前に僕の両肩関節がしつかりと取り押さえられていた。

「アキ、 どに行こうつて言つの？」

「 しょ、 職員室に忘れ物を取りに行く… だ、 け…」

ぐおおー！ 肩が！ 両肩が… こままじゃ外れる…！
肩の激痛に耐えながら僕は必死に一人に言い聞かせる。

「嘘ね」

「嘘ですね」

考える間もなく僕の言葉を否定する一人。え？少しは考えていいんじゃないの！？

「アキ、いくら逃げ出そうと思つてるからって、職員室はないんじやないの？」

「そいつです、まだ更衣室の方が信憑性はあります

「僕はどんな奴だと思わてるの！？」

クラスメイト女子のあんまりな言葉に僕は涙しそうになつた。
ぐつ…まさか彼女達の転校初日が僕の命日になるだなんて……

「何をしている、お前ら席に着け」

気が付けば朝のホームルームの時間になつていた。
鉄人の一喝により、騒ぎは終息した。

普段は暑苦しいだけの存在だが、この時ばかりは鉄人がギリシャ神話に出てくる神に思えた。

段ボールの机にそれぞれ着席するのを確認すると、鉄人は咳払いをした後、話し始める。

「あー、今日はお前らに重要な知らせがある

重要な知らせ？それって…ああ、副担任のシグナムのことか。
確かに重要な事だ。特にクラスメイトは発狂するぐらい喜ぶだろくな……

そりゃあ、フェイト達のクラスってどうだろ？
彼女達の学力は知らないけど、少なくともFクラスは無いだろ？
ひょっとしたら、全員Aクラスかな？

なんて考えていた僕だけど、次に出てきた鉄人の言葉には思わず耳を疑つた。

「喜べ、今日から我がFクラスに副担任と『転校生』が来ることになつた」

はい？

え？ 今、こいつなんて言つた？

「八神先生、入つて来てください」

「つむ」

鉄人の言葉に従い、ジャージに竹刀片手のシグナムが教室に入つてくる。入つてきた瞬間、教室中の男子から『おおー！』などといふ声が響いた。

教卓の前に立つと、シグナムは思わず目が引くぐらい大きな胸を張つて口を開く。

「今日からこの学校に赴任した八神シグナムだ。担当は体育。Fクラスの副担任としてお前らを西村先生共々鍛えていくつもりだから覚悟するのだな」

シグナム、それ脅しになつてない？

まあ、この学力最低クラスの事だからなあ…シグナムみたいな堅物がそんな連中の担任になつたんだ。これからバリバリしごかれる事は火を見るよりも明らかだ。

「ちなみに私は補習室も担当している。もし私の前で戦死して逃げ出そうという愚か者がいた場合は……吉井、ちょっと前に出る」

「え？ うん」

シグナムに言われ、僕は前に出る。

するとシグナムは僕にどこから取り出したのか、厚さ数センチぐらいはある木の板を僕に渡した。何これ？

なんて思った瞬間、シグナムが竹刀を上段に構え、そのまま勢いよく振り下ろしてきた。

「ツー！」

慌てて僕は木の板を両手で突き出し、その板で竹刀の一撃を防いだ。

ゾン！…空気が切断される凄まじい音がFクラスの教室に響く。その後に、パカンという間の抜けた音が響くと同時に、僕の持つていた木の板が真っ二つに割っていた。

何!? これ、竹刀だよね! ? 竹刀なのになんで剣みたいに真っ二つに斬れるの! ?

「！」の剣技をもつてしても連れて行くので…肝に銘じておけ

『『『『イエス・マム! ! ! !』』』』

ひきつった笑みを浮かべるクラスメイト達。

そりやそうだ。

こんな人間技じゃない威力の太刀筋を見せられて驚かない人間などいない。

「いやあ、助かりますハ神先生…」いつのときたら補習の最中でも平気に逃げ出そうとするのですからね

「ふつ、我が剣が必要となつたらいつでも呼んでくれ」

鉄人の言葉に、竹刀片手で答えるシグナム。
なぜだらう…その竹刀がどうしても真剣に見えて仕方ない。

「さて、続いて転校生の紹介だ。入つて来い」

ガラリ、ヒ引き戸が開かれる。

そして…中に入つてくる彼女達を見て僕は…いや、教室中の男子
が息を呑んだ。

最初に入つてきたのは、茶色の髪を一つに結つた美少女、なのは。
次に入つてきたのは、僕の家で同居する事になつた美少女、フエ
イト。

その次に入つてきたのは、今朝の職員室での騒動の元凶になつた
美少女、はやて。

最後に入つてきたのは、はやてを守護する騎士の一人で、美少女
…ではなく、美幼女のヴィータ。

まさか昔馴染みのほとんどが同じクラスになるとは思つてもいいな
かつた。

僕が思わず苦笑した時だつた。

『『『ひおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおお
おおお
おお
おお
おお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおお
おおおおおおおお
おおおおおお
おおおお
おおお
おお

教室中を振動させるほどの声をあげるFクラス男子。

『女子だー。それも全黙、姫路さんクラスの美少女！』

『茶髪の髪の子、可愛いーーー』

『金髪の人、美しそうます！』

『茶髪のショートヘアの人、付き合ってくださいー』

『幼女…はあはあ』

色々と問題発言が飛び交う中、ある者はブレイクダンス。ある者は「サックダンス。ある者はオーバーリミッツ。ある者は昇天……バカばっかりだ。そんなみんなに鉄人とシグナムが睨みをきかせると、大人しくなった。

ちなみに、フェイト達は今の光景に若干だが引いていた。そりや
そりや。

「あー、とりあえず高町から順に自己紹介を始めてくれ

「あ、はい」

今まで呆然としていたのは達だったけど、鉄人の言葉で正気に
戻り、自己紹介始めた。

「高町なのはつていいます。海鳴市から来ました。これから一年、よろしくお願ひします！」

そう言つてぺこりと頭を下げるのは。

続いてフェイトが前に出る…その時、僕と田が合いニコリと笑みを浮かべた。

「フェイト・T・ハラオウンつていいます。なのはと同じ場所から来ました。ちなみに、そこに座っている吉井明久君と、私たちは昔馴染みの親友です。みなさん、よろしくお願ひします！」

そう言つてフェイトが頭を下げた…タイミングを見計らつてクラスマイト達が僕に向かつてカッターを投げつけてきた。い、今避けなかつたら確実に首に刺さつてたよ……

なんて僕が冷や汗をかいと、突然ガタガタという音が響く。音のした方に振り向くと、そこには教卓を持ち上げたヴィータの姿が……つて、何やつてんの！？

「おら、てめえら…何、明久に向かつてカッター投げてんだ？」

ドスの利いた声でカッターを投げつけてきたクラスメイトをにらむヴィータ。

「あたしは八神ヴィータ。そこにいる吉井明久の仲間であり、後ろにいるはやてを守る家族だ。あたしの仲間や家族に手え出してみろ……ぶつ潰してやる」

言いながら教卓を持ち上げ続けるヴィータ。

そこでグラーフ・アイゼンを使わないのはせめてもの情けなのか

なんて思つてたら雄一がすぐりと立ち上がる。

「あー、八神…ヴィータだな？」

「あつ、そうだけど？」

雄一は昨日会つてゐるナビ、一人ともクラスメイトの前では初対面を装つていた。

まあ、昨日あつていた…なんて話したらまた余計な騒動を巻き起しそうのは間違いないし、賢明な判断といえるだらう。

「とつあえず教卓を置け。話が進まんし…何より教卓を武器に使うな」

おお、珍しい。雄一が正論を言つてるよ。

「ナビよお、あいつら明久を」

「解つてゐ。だが教卓を武器に使うのは間違いだ

「うんうん。そうだね。

「使うなら金属製のバットでいい

『『『俺を叩きのめすのはいつのまにかよ…?…?…?』』』

そのとおり。

教卓なんて使つたら先生達が困るもんね。

「解ったよ。ちえ」

ヴィーダが舌打ちをしながら戻っていく。

その姿に苦笑いを浮かべていたはやてだつたけど、気を取り直して、前に出る。

「私はハ神はやて、なのはちゃん達と同じところから来たんや。ついでに、そこにいるアキ君とは知り合いや。これからよろしくなー！」

にこやかに、元気に自己紹介するはやてに今まで殺伐とした雰囲気が、少しだけ緩和される。はやて…正直、助かったよ。

僕がホッと息を吐いた…途端に再び背中に凄まじい悪寒が走る。振り向いてみると、そこにはまるで般若のような鋭い視線で僕を見つめる姫路さんと美波がいた。

(アキ?これってどういふこと?)

(むづくづ、しつかり、一字一句魂魄を込めて話してくださいね)

どうしよう、今すぐ逃げ出したい。

果たして、僕の輝かしい青春の行方はいかに?
次回に続く…!

第三話（後書き）

次回はFクラスでの日常を描いていきたいと思います。

第四話（前書き）

Fクラスでの日常です。

第四話

なのは達が僕らの教室に来てから五分後……これから彼女達との青春の日々が待っていると思うと、僕、吉井明久は胸が躍るような気分になった。

けれど、それは少し後になりそうだ。

現在、僕は尋問されていた。

目の前にいるのはツリ田をもの凄く鋭くしている猛獸のような殺氣を辺りに振りまいている美波。もう一人は虚ろな視線で僕に呪いをかける勢いで邪悪なオーラを漂わせている姫路さん。なぜだ、闇の書の方が怖いはずなのに、あれと対峙したときよりもずっと怖いのは気のせいなのか？

「アキ、これはほんたうじうこと？」

「正直に話していくださいね」

「しょ、正直って言われて……か、彼女達とは昔馴染みなんだだけだよ」

「本当に？」

美波が疑いの目で僕を見る。なぜ？

「吉井君、それは本当なんですか？」

姫路さんが瞳から禍々しい光を放ちながら僕に問いかけてくる……

…ははっ、おかしいや。さつきから体が金縛りにかかつたよつに動けない。

「う、うん… 小学二年生の時に知りあつて… それから昨日まで音信不通だつたんだけど…」

「それなのにどうしてその子達がここにいるの?」

美波の言葉に、僕はため息を吐いた。わるいけど、その言葉には答える訳にはいかない。

ここは管理外世界。魔法の存在は秘匿にしておかなければいけないし、僕らはそれを迂闊に誰かに話してはいけない義務を持っている。とりあえず何か言い訳を考えないと……と思つてたとき、ふと僕は疑問に思つた。

「… というか、一人とも何で僕に聞いてるの? 普通にフェイト達に聞けばいいと思うんだけど……」

「うう…」

僕の言葉に二人が何か言葉に詰まつたような反応をする。

これは…論破できたつてことなのかな? まあ、だったらなんで二人がこんな尋問みたいな行動を取つたのか尋ねて… みようと思ったけど、去年から美波には散々な目に合わされてるし、姫路さんもFクラスに(悪い意味で)馴染んできちゃつてるし、下手な刺激は逆に事態を悪化させてしまつから、やめておこう…… 僕も大分捜査官としての勘が働くようになつたかもしれない。まあ、その成長がこんな生命の危機のような状況が促しているだなんて悲しすぎるけど。

「じゃあ、この話はお終い。そろそろ授業が始まるし、席に着こ

「よ

「わ、わかったわよ

「はい」

僕に言われて、一人ともじぶじぶ、といった様子でみかん箱の机と、自分の席の座布団に座る。相変わらず僕らの教室って凄いよなあ……こんな教室じゃあ、体が弱い人はすぐに病気に……。

僕は一つの可能性に思い当たり、近くで僕らのやり取りを見ていたヴィータに視線を向ける。

「…………（ねえ、ヴィータ）」

念話で彼女に話しかける。

「（ん？なんだよ）」

「（こんな教室の設備じやそ、はあて……また具合悪くしちゃうんじやないかな？）」

「（うーーたしかに……）」

僕の言葉に、ヴィータが驚いたような顔になる。

その言葉に頷いてから、今度はヴィータにつないだまま、雄一に念話で話しかけてみる。

「（ねえ、雄一。ちよつと相談があるんだ）」

「（なんだ、明久）」

「（あと少しで清涼祭の時期でしょう）」

「（ん？ああ、たしかにそうだが？）」

「（それがはやてのことどどひ関係あるんだよ）」

「（ヴィータが焦ったような口調で僕に語りかかる。その焦りは、はやてのことを大事に思つてゐからこそなんだろ？）

「（清涼祭の売上金で、ここは設備少しでもよくできなこかな？）

「（設備をよくするだ？……まあ、できなくもないが……）」

「（本当にかー…）」

雄一の言葉に、ヴィータが光を見た、と言わんばかりの表情になる。僕も雄一の言葉に、少しだけ安心した。清涼祭の売り上げで設備が少しでも良く出来るのなら、それに越した事は無いもんね。

「（やれど、やつなるとどうやって売り上げを手に入れるか考えないこと……あつがとう、雄一）」

「（おー、貸してだよ。後でジュースおごねよ）」

なんて言つてきたけど、ここは頷いておこつ。雄一の助言が無かつたらきっと困つていただろうし、雄一も僕とヴィータのやり取りでなんとなく理由が解つた感じだつたみたいだから、きっと力になつてくれるだらう。そう思えば百円ぐらいの出費なんて痛くも無い。

本当に痛くもかゆくもあるのは……。

『吉井殺す』

『吉井殺す』

『吉井殺す』

『吉井射殺す』

『吉井刺し殺す』

これから異端審問会で物理的にありえそうだ、といつことだ。
というか、みんなさつきから僕を殺す発言しかしてない！なんか
背筋から寒気のようなものをさつきから感じまくってるし…！

『吉井滅多刺しにしてから五体をバラバラに解体して埋めてやる』

『炎よ。　吉井明久に苦痛の贈り物を！…』

『吉イイイイイイイ井くウウウウウン！…！…！』

『十字架は吉井明久を拒絶する』

『優先する。　吉井明久を下位に。　みかん箱を上位に』

「ちよっとおー！？途中から禁書的な魔術を使い始めている人がいる
んだけどー！？ってうわあー炎が飛んでき…つお！危なつ！…！」

飛んで襲い掛かってくる十字架やみかん箱を避けまくる僕。途中

からなんか質量兵器を持ち出してくる連中がいたり、魔術：といつ
名の手品（炎ならガソリンをまいて火をつける等）を使って僕を殺
そうと躍起になる連中の手から必死に逃げる。

「てめえ!...いい加減にしぃおおおおおおおおおおお...!..!..!..!..!..!..!..!

キレたヴィータが教卓を振り回して異端審問会の連中をなぎ払い始めた。おお、助かった……と思つたのも束の間。

「アーヴィング...」

一
あ

数秒後、僕の頬に教卓の角がめり込み、僕は壁まで吹っ飛ばされて意識を失った。

明久（アキ君）

意識を失う直前、彼女達の叫び声が聞こえてきたのは気のせいかな

「うう…… 酷い目に会つた

「大丈夫、 明久？」

「あー…『ごめん、 明久』

今の時間は昼休み。僕は四時限目まで保健室で過ごす羽目になり、目覚めたあとも、ヴィータの一撃を受けて虫歯みたいに腫れた頬にはパツチが張られていた。

「別にいいよ、 それよりも『飯食べよ』

そう言つて僕は笑顔を浮かべて鞄から今朝作つてきた弁当を取り出す。教卓でのヴィータの攻撃なんて、アイゼンでのラテーケン・ハンマーの一撃に比べたらまだ可愛いものだ。

「そうだね」

「せやな

「おひー！」

「うんー！」

僕の言葉に反応してか、なのは達も鞄から弁当箱を取り出す。とはいえ、食べる場所がみかん箱の上だとなんだか少し場所的にあれかもしれない……。

「なんだ、お前らも弁当なのか？」

「あれ？ 雄一もなの？」

雄一の手には一つの……一般的にドカベンと呼ばれるとても大きな弁当箱が握られていた。どうやらここにも今日は弁当らしい。というより、こつも思つんだけどこつの食事量が凄まじすぎるのではなくだらう。フードファイターでも田舎してるの？

「田舎してねえよ。それより、こんなぼろい所より屋上でも行こうぜ。そっちの方が心地よく飯が食えるだろ」

「それもやうだね。あつ、ムツツコーー達も食べるべ。」

「…………（「クツ）」

「ふむ、なら同席せてもいいのかの」

「みんな、ムツツコーー達も混ざるナビ、いい？」

「私はここよ

「私もー。」

「つちもかまわんべ」

「別にここぜ」

「よし、それじゃあ行こつか」

ほつぽい教室で食べるよつも、開放感溢れる屋上を望んだ僕らは、そつそく屋上へと向かおつとした。

「あ、あの明久君達……」

「ん？」

突然呼び止められ、僕らは振り返る。

そこには顔を少し赤くしてもじもじと可愛らしい動作をしている姫路さんと、むすっとした顔つきになつている美波がいた。どうしてんだろ？何か用事かな？

「あの、私たちも一緒にお食事に混ぜてもいいですか？」

ああ、なんだそんな事か。断る理由も無いので、僕らは当然了承した……良かつた、腕間接を持つていかれるような内容じゃなくて。

僕は心の中でせつと胸をなでおろしたのだった。

「……翔子、なんでお前がここにいる」

「……夫の隣に妻がいるのは、常識」

「あはは、なんだか面白そうだから着いてきちゃったよ」

途中で会流した霧島さんと藤さんと一緒に昼食をとることになった僕ら。藤さんはやは氣が合つといつ、同類といつか：まあ、出合つた瞬間になんだかまるで田舎の友のように仲良くなつていた。

ちなみに一人の会話を聞いたのか、ムツツリーは鼻から血を流していた。

「うーん、風が気持ちいいなあ」

頬をなでる初夏の風が気持ちいいのか、フエイトは大きく伸びをしながら堪能していた。その際、風が強いせいか、スカートがはためいていて、ムツツリーはそれを凝視していた。…………なんでだろ？、それをやられると少しだけ腹が立つたのは……。

「ほら、早く！」飯食べようよ

「あっ、そうだね」

僕の言葉に反応し、各々が持参してきたお弁当を広げる。
同じ家で住んでいる僕とフェイトの弁当はエビフライの卵とじ、
ピリ辛風味の野菜炒め、肉じゃが、そして自信作の鶏の五目ご飯だ。
今日は朝早く目が覚めたから、ここまで手の込んだ料理が作れたんだよね。

「おお、明久の弁当のくせに美味そりゃねえか」

「…………手の込んでいる」

「冷めておるのはどうしても冷めてしまつものだから、今回はそれを視点に入れて、冷めても美味しいように工夫したんだ。

「あはは、まあね」

お弁当つて言つのはどうしても冷めてしまつものだから、今回はそれを視点に入れて、冷めても美味しいように工夫したんだ。

「本當……美味しそうね…………」

「はい… 美味しそうですね…」

姫路さんと美波が僕のお弁当箱をじっと見ていた。どうしたんだろ？

「ねえ、アキ。誰に作つてもらつたの？」

「
^
?」

「吉井君、一体誰に作つてもらつたんですか！？」

いや、これは僕が作つたんだけど……

一
嘘
ね

「嘘ですね」

どうして僕の言葉は毎度毎度あつさりと一蹴されるんだろう。
しかしこのまま引き下がるわけには行かない。僕にも一応は料理人としてのプライドがある！

「いや、これは本当に…」

「い・い・か・ら・答・え・な・さ・い・!・!・!

「明久君！誰に作つてもらつたんですか！？」

「いだだだだだだだだつーーー！」

反論しようとしたらアイアンクローを受けていた。どんな罪人で

も、尋問でいきなりアイアンクローセセられた話せるものも話せないと思つ。

「あ、明久！？」一人とも、それじゃあ話せないから…」

「と、いうか、二人とも全然聞こきないよね…？話し合わないと何事も解決しないよ…」

フエイトとののはの言葉によつやく僕はこめかみの痛みから解放される。うう。まだ痛いよ……。けれど美波と姫路さんは今だ納得していないうな感じだ。

「だ、だつて…アキに料理なんかできるわけないもの。それなのに正直に言わないから…」

酷い言われようだ。

すると、はやてが僕の不満を察してくれたのか、説明してくれた。

「あのな、アキ君は、うみえても料理が得意なんやで。私も何度も参考にさせてもらつたくらじやし」

「そ、う？僕も結構、はやての料理には参考にできる点が合つたけど？」

「いやいや、私なんてまだまだや。小学二年でラーメンを麺から出汁まで作り上げることが出来るのはアキ君だけやと思うで？」

その言葉になのは達がうんうん、と頷いた後その時の味を思い出したのか、うつとりとした表情を浮かべた。フエイトにいたつては昨日食べたの美味しかったなあ…などと呟いていた。そんな表情を

されると、料理人冥利に尽きるっていう言葉が浮かぶよね。

「マジかよ……明久、お前それはある意味凄いぞ」

「…………天才の領域」

「たしかにそれは凄いの……」

さらに雄一やムツツリーに秀吉まで僕の料理の腕に驚いていた。いやいや、そんなことはないって。さて、姫路さんや美波はどんな反応を……。

「…………」

「…………」

二人とも石像のように固まっていた。え？ そんなにショックングだつた？

すると美波がゆっくりとした動作で手を伸ばし、僕の弁当から玉子焼きをひょいと取っていった。

「ああー美波、いきなり何を！？」

「…………」

しばらく口の中で咀嚼していた美波だけど、飲み込んだ後、地面に両手をついて頃垂れていた。あれ？ おかしいな……自信作だと思ってたのに……。

「…………こんな」とつて……女のプライドが……」

「み、美波ちゃんー…どうしたんですか！？…やつぱり不味かつたんですか！…？？」

「え？ そんなことないけど？」

言いながらフロイトは僕が作った弁当を食べながら幸せな表情を浮かべる。

フロイトの言葉に反応したのか、姫路さんも僕の弁当からおかずを一つ持つてじつて食べる。どうでもいいけど、僕の了承とかそんなのつて無いの？

「…………」

そして姫路さんも美波と同じように床に両手をついて頃垂れた。
何？本当になんなの？

「……吉井、私にも一つ」

「僕にもくれないかな？代わりにおかずと一緒に交換で」

「あつ、それやつたら私も頼むわ

「私も…」

「なんばわしむ

「…………俺も

「…………俺も

言葉を交わしながら僕達はおかずを交換する。

うん、バラエティ豊かになつて美味しいそうだ。」つやつて友達同士でおかずを交換して談笑しながら食事をするのって学生の特権だよね。

そして僕のおかずを食べた人の感想はといつと……。

「ほう、これは美味しいな」

「……美味しい。うちのコックにしたいくらい」

「…………美味しい」

「たしかに美味しいの?」

「凄いね~吉井君。これ、本当に美味しいよ~」

「にやはは、アキ君の料理の腕、かなり上がったみたいだね」

「そりだね!あの時も美味しかったけど、八年前よりも美味しい!」

「うーん、やつぱりアキ君の料理は美味しいわあ」

「くうくうギガ美味え!~はやての料理もギガ美味いけど、明久の料理もギガ美味え!~」

そう言って笑顔になるみんな。

やつぱり料理って言うのは他人に作つてあげるのが一番だよね。

この笑顔のためにこそ、頑張れるというか。

ちなみに美波と姫路さんは未だに復活していなかつた。

一人には悪いけど、昼休みの時間は限られているので、僕はみんなから貰つたおかずを食べる事にする。

「うん、はやても腕を上げたね。この唐揚げ、とっても美味しいよ」

「ありがとなー！」

ああ、穏やかだ。

澄み切つた初夏の空。心地よい風。美味しい弁当を囲んで楽しく談笑する仲間達。

さつきまでかなり殺伐としていた雰囲気から一転して、この平和で穏やかな昼休み。僕は幸せを感じながらこの時間を少しでも濃密に過ごそうと思った。

すると、今まで頃垂れていた姫路さんがガバリと起き上がる。ん？一体どうしたんだ？

ゾクリ！――――

瞬間、僕らの背筋に痛みを感じるほどの寒気が走る。

それは僕だけではないらしい。雄二やムツツリー、秀吉までも恐怖に戦慄する表情になっていた。ま、まさか……姫路さん……。

「ジツハワタシ……」

おかしい、震えが止まらない。

なんだ、この感じ……虚数空間に引き込まれる方がずっとマシだと感じられる気配だ……。

ギュウッ！－

隣ではフェイトが顔面を蒼白にして僕の腕にしがみついていた。フェイトだけじゃない。なのはやはやて、ヴィータまで顔を真っ青にしていた。え？どうしたの？四人とも、姫路さんの料理は今回が初めてなはず……。

「（あ、明久……なぜか、私達……このお弁当に命の危機を感じるんだけど）」

「（う、うん……それにこの感じは……）」

「（せや……もう何度も体験している……）」

「（シャマルの時と同じ気配だ……）」

念話で僕に語りかけてくる彼女達。

そして納得してしまう。そういうえばシャマルも姫路さんレベルの料理人だったことを……だからみんな反応したんだ……体が、すっかりその恐怖を覚えてしまっているから。

「オベントウヲツクツテキタンデスケド……」

そう言つて弁当箱のふたを開ける姫路さん。
中から現れたのは見た目美味しいそうな可愛らしいオーソドックスなお弁当。

僕らは最初これに騙され、あっさりと命を刈り取られた……そのせいか、見える。その弁当から放たれる禍々しい気配を！命を根こそぎ刈り取るであろう刃が！歪められた空間から現れる悪霊の腕が！くつ……体がバインドにかけられたように動かない……

そして、死神は無情にも僕らに告げる……

「モシヨロシカツタラメシアガツテクダサイ」

逝つて来い、と。

『……………逝ただきます』『』『』

葛藤の末、僕らは死神の誘いを受ける事にした。

見た目一番よさそうな玉子焼きを選び、僕はそれを口に運ぶ。

「……………」

口の中に異物が入った瞬間、僕の目の前は暗転し、一瞬だが死んだ爺ちゃんや婆ちゃん、リインフォースが見えた気がした。く、口に入れただけでこの破壊力か……………

「……………（ギリギリギリギリ）」

周りを見ると、雄一はプチトマトを口に入れて、へたを持つたまま白目を向いて首を三百六十度回転させていた。何…？プチトマトつてただ単に添えるだけのものだよね…？それが何をやつたらそんなエクソシストみたいな現象を起こすわけ…？

「……………（ビヨンビヨンビヨン）」

「ロッケを食べたムツリーは床に倒れ、その体を痙攣させて

いた……おかしい、ムツツリーの体から電気のよつたものが見える。

「…………かわ、いほひ…………」

「…………（シユ————）」

「…………（ぐつたり）」

「…………（カチンゴヤン）」

「…………（ジロコ）」

サラダを口にした秀吉は首をかきむしり、まるで雛見沢症候群にかかるような感じになっていたし、フエイトはご飯を口にした瞬間その可愛らしい口から煙を上げていたし、なのははエビフライを食べて頭からキノコを生やして倒れたし、はやは僕と同じ玉子焼きを口にしたはずなのに、僕とは違つて体が石化していたし、見えなかつたけど、何かを口にしたヴィータは両耳から半透明で緑色の液体を噴き出して轟沈していた。えつー？本当に何を食べたのヴィータ！？

「み、みんな…………うつー！」

なんて驚いていた僕だけ、うつかり口にしていた玉子焼きを一噛みしてしまう。

瞬間、僕の上半身の各所が突然裂傷し、そこから噴き出す血……「はつー！な、なんて破壊力だ……というか、どんなものを入れたらこんな結果が……。

ふつ…………そろいもそろつて僕らって…………本当に、バ……カ……

.....。

青空を見ながら、僕らは仲良く逝つた。

ひつして、僕らも含めてフェイト達は転校初日から保健室に世話を
ことになつたのだった。

第四話（後書き）

姫路さんの手料理は相変わらずの殺人兵器…おそらく、シャマル共々これからもガンガン出て来るでしょう。

第五話（前書き）

あの惨劇から数日後……彼らは今。

第五話

「……雄一」

「なんだ、翔子？」

「……フェイトや吉井が進んでいること、知っている?」

「ん?あー……そのことか。まあ、知っているが?」

「……私たちも、負けられない」

「そうだな、明久の野郎はバカの癖に魔力ランクがある年でSSS - だもんな。俺らも負けてられない」

「……そうじやない」

「それに他の連中もどいつもこいつもSランクだ。俺らも一応、Sランクとはいえ、あいつらの足を引っ張るよつなことはできねえからな」

「……雄一」

「それに知ってるか、翔子?あのバカは『紅の魔剣』なんて異名まで持ってるんだぜ?あの能天気な面からは想像できない頭蓋が締め付けられえええ」

「……雄一、重要なのはそいじやない」

「いや、これから先のことだから重要だつが、……」

「……私が言いたいのはやじじゃない」

「あん？」

「……フロイトは、吉井の家に住んでいる」

「まあ、形としてはホームステイだがな。それがどうした?」

「……だから私も雄一の家に、ホームステイする」

「待て翔子、色々すつ飛ばしそうだ」

「……問題ない。フロイトは普通に暮らしている」

「あれは学校公認だからだ! 普通に高校生が同棲してゐるのは、色々と問題があるんだよ! …」

「……大丈夫、問題は無い」

「あへ…どうこうだ?」

「……なのはなとまやで達は、普通に同棲している」

「性別を考えろ! あれは女の子同士だから免除されてるんだよ! …男女が一緒に暮らせるのなんて、色々と問題があるから学校が納得するわけねえだうが! ! !」

「……雄一は意地悪」

「俺は当たり前の事しか言つてねえだろ？が……」

「……でも吉井達は同棲してる」

「明久達のは色々と訳があつて、同居してるんだろ？多分だが……」

「……」

「……訳？」

「それがなんなのか解らないがな。そういうえばあいつ、ロストロギアを体に持つていたって言つてたな……それが関係しているのか？」

「……違つ

「あ？ なんでそう言い切れるんだよ」

「……フェイトは、リンクティ艦長の義理の娘」

「だからなんだ？」

「……吉井は、その人と昔からの知り合いみたいだから……」

「……明久の奴、外堀を少しずつ埋められていいてるのか、哀れな奴だ」

「……だから、私たちもやるべき」

「はつ？ いや、だから無理だつて言つてるだろ？がー！ 大体そんなん許可できるわけ……」

「……大丈夫」

「あ？」

「……お義母さんには、もう許可を貰っているから」

「お袋も

「つづ……」

あの騒動から三日後。

土曜日に入り、学校が休みになつた僕らは一時、故郷である地球から離れ、ミッドチルダに来ていた。別に遊びに来たというわけでは残念ながらない。ではなぜ地球から離れ、ここに来たのか？

それは僕らの戦力を把握したいからだ。

雄二や霧島さんの実力のデータは、手元にちゃんとあるけど、やつぱり実戦でしっかりと把握しておきたいと……そのシグナムとフェイトが言ったので、じうしてやってきました。

ちなみに、万が一エネミーが出る可能性があるので、なのはに、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、アルフは地球で待機しておいてもらつている。

エネミーとの戦闘は三日続く事もあれば、五日間パタリと音沙汰が無い時もある。油断はできないんだけど、その相手がいつ現れるのかまったくタイミングがつかないので、正直精神的に来るものがあつたりする。

……話がされたね。

今、僕達がいるのは模擬戦会場。

周りは巨大なビル群に囲まれ、いつでも模擬戦を始められるようになつてはいるんだけど……。

「…………」

なぜかその会場でデバイスを開いて黒服に赤いスカーフを巻いたバトルジャケットを身に付けた僕と。

「~~~~~」

嬉しそうな表情で黒いバトルジャケットを身にまとったフェイトがいた……どうして、こんなことに……。

それは一時間前に遡る。

「うーん、クラナガンに来るのも久しぶりだなあ

管理局員の制服を身に付けながら、僕はそう言つて体を伸ばす。街並みは向こうとあまり変わらないけど、技術的にはこっちの方が上なんだよね。パソコンのキーボードは宙に浮いてるし、他の物だってかなり違っている。僕らの世界から見ればファイクションの中だけの存在の近未来的な街並みに、少しだけど僕は興奮していた。

「はあ、やっぱこっちの世界の技術はすごいよなあ……」

「だな、向こうではまだまだ実現できないもんが多いが、こっちに

くればそれが当たり前つてのが多いからな

僕の言葉に管理局員の制服を着た雄一が同意していた。

やつぱり雄一も僕と同じように興奮しているみたいだ。男としては、多少なりともSFチックな近未来に憧れをもつているものだから、このミッドナルダの世界は、僕ら男子の理想郷とでも言えよう。

「一人とも、何をしてくる。時間は限られているのだから、早く目的地に向かうぞ」

雄一と話をしていたら、シグナムに呼び止められた。

そうだった……一応、こっちには仕事の一環で来ているんだった……やれやれ、まだまだ僕も公私の切り替えが出来てないみたいだ……。

「一人とも、早く行けよ~

FHイトも呼んでいるので、僕は手を振って応え、急いで向かおうとしたんだけど……あれ? 雄一と霧島さんがいない……辺りを見渡してみると……。

『……雄一、あのマンションはまだつづく。』

『あ? 何がだ』

『……将来の家として』

『……うん』

『……や』

『高そうだけど頑張れ。俺が住む家はもっと安そうな物件を検討してみるわ』

『……今のは、許せない』

『ぐがおおお　　！！待て！待て、翔子！…』

霧島さんの手が雄一の頭を鷲掴みにし、雄一は傍から見ても痛々しげな悲鳴を全力で上げている……道行く人はその光景にドン引きしていた。

どうしよう、もの凄くあの二人に関わっちゃいけないよ、うつた氣がするには気のせいかな？

否。

これは一般的な観点から見ても、充分に正常的な判断だと僕は自分に言い聞かせ、そのままシグナムとフェイントはやってのもとへと駆け出した。

『あ、明久！？てめえ、逃げ出してんじゃねえ！！おい！そこにいる思慮深さが感じられない顔をしているのは俺の連れだ！頼むから連れてきてくれ！！』

『……雄一、浮氣は許さない』

『今の発言にどこをどう解釈すればその言葉が出て来るんだ……あががががが！さつさと助ける明久あ……！』

『……雄一、私達が暮らす物件を見に行こ』

そのまま霧島さんは雄一を連れてビーチへと行ってしまった。

『 』 ･･ 』 』 』

まあ、近い未来確かにこっちで生活することになるんだろうけど…
二人とも、今日こっちに来た理由解つてるのかなあ？

「吉井、先に行ってくれ」

そう言ってシグナムが騒ぎ続いている一人の元へと歩き出す。

「じめん、シグナム…僕の悪友が、迷惑かけるね…」

「何、気にするな。今私は管理局員であり、同時にお前達の教師
でもあるのだ……担当の生徒を面倒見るのは当然の義務だ」

理解ある教師の言葉に僕は感動しながら、あそこで騒いでいるバ
力な悪友を任せることにした。遠くから『俺が悪いのか！？』と驚
愕に満ちた叫び声が聞こえてきた気がするけど、とりあえずスルー。

「ありがとう、シグナム。それじゃあ先に行つて

「なに、気にするな。後で私と一緒に戦えてくれるのならな

「やつぱり悪友だからねー僕が一人を連れてくるよーーー」

わざわざ担任の手を煩わせるほどのことではないので、僕は笑顔
で一人を追うとしたんだけど……。

ガシッ！

なぜかフロイトに肩をガツチリと握られ、一人を追う事ができな

くなつた。

「あの、フェイト？」

「なに、明久？」

「僕……一人を追いかけないといけないんだけど……」

「大丈夫だよ、シグナムがもう行つたから」

あら不思議。

さつきまですぐ近くにいたシグナムがもう既に雄二たちを追つてはるか遠くへ行つていた。

とりあえず、これで僕とシグナムの模擬戦は決まったも同然だつた……うう、シグナムのレヴァンティンの炎は正直トラウマなんだよなあ……八年前、モロにくらつてビルの壁に叩きつけられながら地面に落下していつた記憶が蘇つてくる……。

「いやあ、なんかこっち来てもあのテンショソントある意味尊敬できるわ」

「ですー」

そう言つて苦笑いを浮かべるはやてと……その隣で浮いている三十分くらいの小さな少女はリンフォース？。通称リンだ。最初の自己紹介の時には見かけなかつたけど、後々で聞いて驚いた。

どうやらまた、はやてのイタズラ心が発動したいみたいで、最近ではそれに慣れてきてしまつていて自分がいて、微妙に複雑な気分です。

まあ、それは良いとして、現在僕はフェイトに手を握られて歩い

ている。

フロイトのすべすべとした柔らかな手の感触に少しきドキドキしながら、僕はフロイトの顔を見てみる。すると彼女はウキウキといった擬音が聞こえてきそうな笑顔で僕を引っ張っていた。

「えっと…フロイト、なんか凄く楽しそうだね？」

「あ、うん！」

僕の言葉に振り返って眩しいくらいの笑顔を見せるフロイト。でもなぜだろう、その笑顔に僕は少しだけ不安を覚えていた。はやての方に振り向くと、はやはグッと親指を立てて『頑張れ』と田舎囃。リインは……合掌。なぜ？

「明久、早く訓練所に行こうよー」

「えっ？ 雄一達が来てからじゅ……」

「何言つてるのー…それじゃ、私と明久の模擬戦が出来ないでしょー…」

え？

それからあれやこれやと場面が変わつて、現在管理局員専用訓練所。

管理局員なら、事前に申請さえしていればいつでも利用ができる

便利な場所だ。僕も「」で何十体のガジェットと戦つたのを覚えている。

そして雄一と霧島さんの実力を測るために来たのに、なぜか僕とフェイトは目の前で対峙していた。

「ああ、明久。準備はいい？」

「うーん……」

正直、あまり気が乗らない。

この前久しぶりに再会した昔馴染みと、それも女の子に剣を振るうなんて…なんというか、もの凄くやり辛いというか…まあ、向こうの僕になればそんなの関係ないんだろうけど……でも…それでもひとつ涙目になつた感じも…って、何考てるんだ僕は！？

まったく、そもそもあいつが霧島さんに拉致られなければフェイトと戦うなんてことには……。

「なんだ、明久？お前らも模擬戦やるのか？」

「あ、雄一」……

僕が心中で愚痴つてたら、雄一と霧島さんがいつの間にかここに来ていた。まったく、よつやく「」に来たか……そうだ…この状況を利用しよう…。

「ねえ、フェイト…今日は雄一と霧島さんの実力を測りにきたんだよね？」

「やうだけど？」

「うんうん、だったら

『だったら2対2の模擬戦を行えばええんとひやひや』

はやじく つ……

なんてことを…せつかくフロイトと模擬戦をやらなことひに配慮
しようと思つてたのに……なんて思つてたらほやて
から念話がかかつてた。

「（あー…アキ君、悪いんやけど…フロイトちゃんと模擬戦やつてくれへん…）」

「（なんで…）」

「（フロイトちゃん、じつもシグナムと同類になつてしまつあるん
や……）」

なんて悲しこことなんだ……八年という歳月は、人を変えてしま
うには充分すぎる年月なのだと、僕はこの時学んだ。

「（せやナビ…フロイトちゃん、アキ君と模擬戦をするの楽しみや
つたみたいやから…）」

「（……）」

僕との模擬戦が楽しみ、か。
やれやれ、できるのならもっと違うものを楽しみにして欲しかっ
たよ……。
でも。

「（解つたよ）」

その言葉で、僕の迷いは消えた。
だつて楽しみにしていたつて言うのなら、それを無下に断るのなんてできないもんね。

「フェイト、本気で行くよ？」

「うんー。望むところだよー。霧島さん、準備はいい？」

「……問題ない、いつでもいける

そう言つて紺色のバリアジャケットを身に付ける。その後に霧島さんの手には、西洋の騎士が馬上で使う長大なランスが握られていった。先端の方は薄くなつていて、突くだけでなく、斬るという戦い方も可能なデバイスだった。

「……ゲイヴォルク、準備はいい？」

『 yes . my load』

デバイス特有の機械音声を確認すると、霧島さんは長大なランスを軽々と片手で振るう。その後に、三角形の魔法陣が浮かび上がつた……以外にも、霧島さんはベルカ式の魔導師みた이다。

「雄一、戦闘態勢！－！」

「解つてる……戦^やるぞ、イージス！－！」

『了解です、坊ちゃん！』

雄一の言葉に『デバイスが応え、雄一の体が光に包まれ……ん？

『『坊ちゃん！…？』』

「…………」

赤を基調としたバリアジャケットを身に付けた雄一が、なんとも言えない複雑そうな表情をしている。それより今、なんか雄一なんかには大変似つかわしくない単語が出たような気がするんだけど……。

『どうしたんですか？皆さん』

「あー……イージス、少しだなあ……」

『はい、何でじょつか坊ちゃん？』

「それ言つの、止めろ」

『無理です、坊ちゃんは坊ちゃんですか？』

「…………はあ」

雄一がなんだか疲れた表情でトンファーを握っていた。

僕は雄一の手に握られている武器を見て、思わず意外だな、と思った。

トンファーは制圧と無力化に特化した武器で、攻撃方面というよりは、むしろ防御に特化している武器だ。僕の知り合いにも、トンファータイプのデバイスを扱う人がいたけど、まさか雄一もトンファ

ーを使うなんて……。

「雄一ってトンファーを扱うんだね」

「ん？ああ、色々試してみたんだが……」いつが一番しつくきてな

「へえ……雄一って、見た目攻撃専門って感じだから防御の方なんて考えてないと思つてたのに……」

地球じゃ『悪鬼羅刹』なんて異名をつけられるぐらいだから、僕は攻撃に特化している武器を選ぶと思っていたから、トンファーなんて武器を雄一が使うなんて、と内心驚いていたら……。

「…………翔子から身を守るために必要だつたからな…………」

「…………」

あら不思議。さつきまで意外でしょうがなかつたのに、今の一言であつところ間に納得できてしまつた。

見ると、フロイトも苦笑いをしながら目を逸らしていた。多分、この様子を見てころはやしやリイン、シグナムも僕と同じ心境なのだろう。

「氣まずい、なんだかもの凄く氣まずいぞ……」

「…………？」

霧島さんはみんながなぜ黙っているのか解つてないみたいだ。いや、原因は一応君にあるんだけど……でもそれを言つのもなんだかなあ……。

なぜか模擬戦を始める前に一気に脱力してしまつてゐる僕らだつ

た。

『ぼ、坊ちゃん! 大丈夫です……坊ちゃんの身は、私が守りますか
ら……』

「それ止める、イージス」

さつきからちょいちょいに入る雄一の「バイス、イージスの坊ちゃん発言。これもやる気を下げる要因になつていてるんだよね……。いやだつて、雄一が『坊ちゃん』だよ?

もの凄く似合わないから、普段なら大笑いするといふなんだけど……なんというか、やる氣に拍車がかかっている時にやられると、一気に脱力する。

「……なんか、すまん」

雄一も自分の「バイスのせいなのは解つていいみたいで、疲れた表情でため息を吐いていた。まずい、このままじゃ今日は解散という可能性もある。

僕らは、雄一と霧島さんの実力を測るためにわざわざリハーサルまで来ているんだから、ここに何もしないで帰るなんて……ところのまですかにできない。

『あー、みんな? 私からいい案があるんやけど?』

スピーカーからはやての言葉が漏れる。
ナイスはやて! なんとしてもこの状況を開拓できる案を

『今回の模擬戦、勝つ方が負けた方に好きな命令を一つでも決めていいのはどうやる?』

あれ?なんか"デジャブ"?い、いや...これはほんの少し前にTクラスとAクラスの試合戦争であつたような...。
というか、はやて!なんだその罰ゲームみたいな提案は!...いや、間違つてはいけど、そんなもので僕らがやる気を見せる?...つて、うおおおお!??

突然背筋に凄まじい寒気を感じ、僕は驚いて飛びのいた。

「.....フュイト」

「霧島さん...ひづる、翔子!」

「「頑張りましょ!...」」「

向こうではフュイトと霧島さんが、傍から見ても解るぐらいのもの凄いやる気を見せていた。

目の錯覚なのか、一人の目が光を放つて居るように見えるや...。

「明久ー!」の勝負、何が何でも勝つぞー!..

「ゆ、雄二ー!」どうしたの、急に!?」

隣では先ほどとは打って変わって凄まじいやる気を見せて居る雄二がいた。

「「」の勝負、負けたら確実に俺の人生を一生左右する事になる!」だ

からお前も全力を出せ…なんとしても」の勝負、勝つ…！」

おお、『』までもやる気を見せて『』雄一を見るのは試合戦争以来だ。と、いうか、試合戦争以上のやる気を見せてない？あと、冷や汗もの凄いよ？

とはいって、僕もそれなりにやる気にはなっていた。
自分が罰ゲームを受けたくないのもあるし、それに……。

「雄一、もし勝つたらどうするの？」

「翔子に一ヶ月…いや、半ヶ月…一週間…三日…一月でもいいから、俺の家に来るな」と『』

今、もの凄く譲歩してなかつた？

といふか、さつきからもの凄く冷や汗をかいているけど、その汗は一体どうしたの？

「……翔子にそれを伝えて半殺しにされる自分が想像でききたんでな…」

「なるほど、よく解つたよ」

『』こつは本当に苦労している。

「ちなみに、半月では上半身の皮膚をはがされ、一週間では脳が圧迫されるぐらいの握力でアイアンクロスをかけられ、三日だと腕間接の大半を外され、一日だと五指を外すだけでなんとかなると思つた」

「まあ、それくらいが妥当だらうね」

美波や姫路さん辺りで仮定しても、それくらいがベターだと思つ。さてと、もしも僕が勝つたらフェイトになにを頼もうかな。

「…………（じゅるつ）」

「おい、明久！なにを想像してゐるんだー？」

「はつ！僕は何を！？」

雄一に言われ、僕は意識を取り戻す。
あ、危なかつた。危うく夢の世界にトリップするところだつたよ。

「お前は何を想像してゐたんだよ…………」

「えつ？い、いやー別にムチと繩……なんでもないよ…………」

「おいー今一瞬、聞き逃してはいけないような単語を耳にしたぞー！
とこづか、お前つてそういう趣味だつたのかー？」

「べ、別に普通だよー！」

「ムチと繩で何かするのが普通なわけあるかーーお前とは一年來の付き合いだが、今の言葉には正直引いたぞー！」

「うつ……さすがに悪鬼羅刹と呼ばれた雄一も僕のあれはちょっと引くか……やつぱり世間一般ではこの趣味はあまり良心的ではないみたいだ。

「……つて、あれ？」

「ねえ、雄二……フェイト、鼻血を流していない？」

「あっ？何を言つて……」

僕の指を指す方向、霧島さんの隣ではムツツリー二みたいにフェイトが鼻血を流していた。な、なんか足元に血溜まりできてる！？

「え、えへへ……あ、明久を好きに……あつ、ダメだよ明久。好きにするのは私なんだから……ああ、でも……明久あ……あつ、うう……え、えへへへ」

「……フェイト、大丈夫？」

霧島さんが鼻血を流しているフェイトに近づいてそう囁つけた。フェイトは鼻血を流したまま、もの凄い幸せそうな表情のまま固まっていた。気のせいか、手に持っているバルティックシユが冷や汗を流しているように見える。

…………フェイトが僕らの世界に戻ってくるのは、それから三十分近く過ぎた後だった。

ムツツリー二にいつもやつてあげている輸血をフェイトに済ませ、ようやく僕と雄二とフェイトと霧島さんの戦いが始まったのだった。

「どうかフェイト、一体何を想像したの？」

第五話（後書き）

次回、明久＆雄二VSフェイト＆霧島の熱いバトルが始まる！！
一人は楽しみにしてきた事を叶えるために、一人は彼女の想いに応
えるために、一人は長年抱いてきた願いを叶えるために、一人は人
生の危機を感じながらそれを回避するために……様々な思いが、今
……炸裂する！

…………模擬戦、開始』

『つて、なんで君がいるの――――――!?』

『…………それは次回のお楽しみ』

第六話（前書き）

意外な奴が登場。 明久&雄一→Sファイト&霧島戦です！

第六話

『レディー……』

はやての合図と共に模擬戦が開始した。

「翔子！」

「……了解」

フロイトの言葉を合図に一人がこちらに向かって走ってくる。フロイトと霧島さんは、今回初めてコンビを組んだはずだ。なら最初は僕達を分断して、一対一の状況にして攻めてくるはず。それならば！！

「（雄一、さあと二人は……）」

「（ああ、おそらく俺達を分断しようとするはずだ……）」

やはり雄一と僕の予想は同じみたいだ。

そうなると……おそらく次も僕と同じ考えに違いない。

「（なら俺達はあつちにあつちにないものを使えば言いだけの話だ！）

彼女達に無くて僕たちにあるもの。

それはコンビネーション。

魔法を使っての戦いは初めての僕らだけど、じつとは幾度と無く本物の死線を潜り抜けてきた。僕らのコンビネーション……見せ

てあげるよ。

「行くよ、フロイトー！」

「来い！翔子！…」

「……言われなくとも」

「勝負だよ、二人とも…」

僕らとフロイト達の距離がどんどん縮まつていぐ。僕らはそれを冷静に見ながら、タイミングを計る。

後三秒、一秒、一秒……今だ！

「雄一！」

「明久！」

来るべき時は来た！僕らは田で合図すると同時に。

「「「ここは任せた！…」」

告げると同時にバックステップ。

霧島さんの実力を測るために、雄一、この場は耐えてくれよ…って！

「雄一！お互いに相手に任せてしまつあるのさ…！」

「いや、ここは明らかにお前の出番だろ！俺はこの場では翔子とか戦った事がないんだぞ！…？」

「それを言つなら、僕だつてこの場ではフェイトとしか戦つたことが無いよ……」

「このバカが！今重要なことは、相手の実力を測る事だろ……」

「解つてる！だからそのトンファーを使って僕の盾になつてよ！ その間に僕が霧島さんの実力を測るから！」

「いいや、お前が体張つて盾になれ！俺はその間に態勢を立て直しじっくりとテスタロッサの実力を測る……！」

「誰が相方を平然と捨て駒にするお前なんかの盾になるものか……！」

「その台詞そつくりお前に返してやる……！」

「言つたな！？上等だ！表出ろ……！」

「はつ、バカが！返り討ちにしてやる……！」

僕は雄一に一気に接近して鞘から刃を抜刀、雄一に剣閃を放つが、雄一はトンファーを使ってそれを防ぐ。その後に雄一はパンチの応用でトンファーを放ち、僕は体を捻つてその一撃を避ける。

「やるな、明久……だがこいつならどうだ！イージス・カートリッジロード……！」

『…… explosion』

ため息混じりのような機械音声がデバイスから響くと、トンファ

ーの一部がスライドし、そこからガシャンという撃鉄音と一緒に薬莢が蒸気と一緒に放出される。

魔力を跳ね上がらせるカートリッジシステム……やっぱり雄一も持っていたのか。僕はとっさに危険を察知して雄一から離れる……瞬間、雄一がニヤリと笑つた！？

「短慮だぜ、明久！」

『arrow form』

嫌な笑みを浮かべたまま、雄一は両手に持つたトンファーのグリップをレバーみたいに前へと動かし、そのままグリップの先端同士をくっ付ける。

それによつて現れたものは、機械で出来た……』。

雄一の前にミッド式の魔法陣が展開される。同時に僕は自分のミスに気付いて舌打ちした。とつさだつたとは言え、雄一が遠距離系統の魔法を使うとは考えも……いや、そもそも戦闘に余計な先入観と固定観念を用いた事自体間違いだった。

見た目とは裏腹に雄一はかなりの知将だ。

試召戦争で味方を状況に応じて正確に動かす将の役割を持っているあいつのことだ……遠距離攻撃を使つてくることだつてあり得るのに、そのことを一切考慮しなかつた。

完全に僕のミスだ。

「つくれー！」

悪態を吐きながら僕は態勢を立て直そうとするが、その前に雄一は青い魔力で出来た矢を手に持ち、同じように魔力で出来た弓弦に指をかけ、矢を僕に向かつて放つていた。

「くたばれ明久ああああああああああああああ！」

S
W
a
l
l
o
W

b
l
o
W

ズドン！という発射音と共に、青い閃光が僕に向かってくる。僕は障壁を開こうとしたけど、その瞬間。

「つ！三つに分かれた！？？」

雄二の矢は、飛来して いる途中で三つの矢に分割され、それぞれがまったく違う角度で僕に向かって飛んでくる。

「ウル」

僕はギリギリで一つ目の矢を避けるけど、残り二つが僕に向かって飛んでくる…しかも、さっき避けた矢も方向を変えて僕の方に向かってきているとフォルトが伝えてくれる…この矢、追尾機能まであるのか…仕方ない。慣れてないけど、ここはモードを切り替える必要がある……。

思考がそこまで達すると僕の行動は早かつた。剣を鞘から引き抜き、叫ぶ。

「フルト！モード・ツインファング！！」

yes sir

刀と鞘に亀裂が入り、分解され、パズルのように組み合わされ、『刀』と『鞘』が両刃のナイフに形態を変える。そのナイフの中央

が分断し、そこから銃口が顔を出す。

同時に『俺』は周囲に魔力の弾丸を形成し、双銃に向かつてくる矢に向かつて構える。

「クリムゾン・スターーー！」

ドドドドドッ！ 紅い弾丸が一斉掃射される。

同時にトリガーを何度も絞る。

反動と共に、銃口から魔力で出来た弾丸が放たれ、俺に向かつて迫つてくる青い矢に放つ。

ドン！ という爆発音の後、三つの青い矢と複数の紅い弾丸が相殺される。

ふう、と一息吐くと俺は地面に降り立ち、雄二を見てニヤリと笑う。

「よう、じつちの俺は初めてだよな、雄二？」

俺の言葉に、雄二が目を大きく見開いて俺を凝視していた。さすがの雄二も、今の俺の姿を見れば驚くのは当然、か。

「お前… 明久、なのか？」

訝しげに俺を見る雄二。

まあ、大抵の奴は初めて俺を見るとそういう顔になるがな…。

「ああ… そうだ」

ニヤリと笑みを浮かべ、俺は告げる。

「俺は吉井明久のもう一つの人格だ」

「なんだとー?」

俺の言葉に、雄一が驚愕する。まあ、当然の反応だひつ。

「……嘘つて訳じやなわせうだな……わざと普段ぜんぜん雰囲気が違う……」

「だらうな……まあ、いつちの俺になるのにはちょっとした条件があるんだよ」

「条件だと?」

「俺の人格が変わるのは『鞘から剣が抜かれた時』なんだよ。居合いをベースに使つてんのは、戦闘中に性格が変わつて味方が動搖するのを防ぐためだ」

まあ、居合いをベースにしているのはそれだけじゃないがな。と付け加えた後、俺は『デバイスを構え、不適に笑つた時だつた。スーパー カーからはやて達の声が漏れてきたのが耳に入った。

『驚きですう、明久さんの雰囲気がガラつと変わりましたですう』

『リインは初めて見るんやつたな。あれはアキ君のもう一つの人格、通称『抜刀』モードや!』

『…………そのまんま過ぎる気がする』

『細かい事気にしてたら負けやで、康太君』

とスピーカーからもの凄く聞き覚えのある声が……つて！

「「なんでここにムツツリーーがいるんだよーー」」

俺と雄一は全力でスピーカーに向かつてつむ。本当になんでお前がここにいるんだよーー？

『…………俺も、一応魔導師』

「マジでーー???

ぜんぜん聞いてないぞーー??"といふか、なんで俺の身近には魔導師が三人もいるんだよ！

『…………情報を集めるのに必死だつたから、挨拶にいけなかつた

「情報？何か手に入れたのか、ムツツリーー??"

ムツツリーーの言葉に、俺は僅かばかりに期待のこもつた声でムツツリーーに尋ねる。ムツツリーーの情報収集能力は並大抵のものではない。普段はエロ方面にしか使われてないけど、その能力は様々な面で役に立つはずだ。

『…………今のところは、何も』

「…………そ、そつか……雄一、お前…ムツツリーーが魔導師だったって

「……」

「一応は知っていた……というか、今回の件にはムツツリーーは関わらないと聞いていたんだが……」

確かにそうだ。

俺の家に集まつたとき、一人ほど加勢に来る、と聞いたのを俺は覚えてる。それなのにそこへさらに増援？ 一体どうしたことだ？

『…………俺が志願した。おそらく、俺の力が必要になるだろうか』

『』

「……ムツツリーー」

今の言葉には正直、かなり感動した。
ありがとう、ムツツリーー……これからようしへ頼むぜ。

「さてと、話がまとまつたところで……始めよっか、雄一」

「……そうだな……なんか今のお前とななら結構ウマが合つそうだな

そういう言ひ方でヤリと笑いながら俺と同じようにデバイスを構える
悪友。

「そいつは同感だな」

たしかにこっちの俺なら雄一とは気が合つそうだな。

自然と頬が緩む。

俺達は互いに睨み合いながら笑っていた。

「言つとくが雄一、こつちの俺は容赦つてものを知らねえぜ」

「そりや面白え。俺も容赦つてものを知らねえからな」

拳銃モードから切り替え、剣の状態に切り替えると、柄の先端を接合させる。出来上がったのは長い柄の両端に刀身を持つ剣：ダブルセイバー。

本当なら刀の方が使いやすいんだが……またあの矢を放たれるかも
されねえから、こっちで対応するしかない。

「行くぜ、雄一！」

「ああ、上等だー！」

俺達は同時に大地を蹴り、一気に肉薄すると互いの獲物を打ち合
わせ始める。

槍を使う要領で刃を突き出す。刃はトンファーで受け流されるが、すかさず柄を回転させ、もう一つの刃を前方に押し出す。だが雄一は俺が次々と繰り出す剣戟をトンファーで防ぎ、弾き、受け流し、そして反撃を仕掛けてくる。ちつ、やつぱ強えな。

なんてやつてこる時だった。

「...バルディッシュ」

plasma lancer

「……ゲイヴォルク」

『stab frieze』

「ファイヤー！」

「……ファイヤー！」

「「あ、」「

ドドドドドドドドドドッ！俺達がバカをやつている間に、
フェイトから槍状の閃光が、霧島から氷の槍が投擲された。
その瞬間、俺のフォルトと雄二のイージスが光りだす。

『protection』

慣れ親しんだ機械音声と共に、俺達の目の前に紅い障壁と、青い
障壁が目の前に展開される。金色の閃光と、氷の槍が障壁に激突し、
数秒の均衡の後、彼女達の魔法が弾き飛ばされる。

「フォルト！？」

「イージス！？」

『二人とも、喧嘩は後に下さい』

『そうですよ、今は戦いに集中してください……でなきや坊ちゃん
の人生は……』

「よしやるぞ、明久！防衛は俺に任せろーー！」

「へっ？あ、ああ……」

イージスの言葉を聞いた瞬間、雄一は冷や汗を流してトンファーを構える。…………そう言えば賭けをしてたの、すっかり忘れてたな。……まあ、その前に色々あつたから仕方ないとは思うけど。二人の魔法を防ぎきったバリアーは消滅し、俺達は前へ駆け出す。

「（雄一）フュイトはスピードと攻撃に特化している戦いをするぜ（」

「（翔子も似たようなものだが、あいつの攻撃方法は厄介だ。テスタロッサの攻撃を防ぎつつ、翔子を先に潰すぞ）」

霧島の攻撃が厄介？

それは一体どういうことだ、と雄一に尋ねようとしたが、その前に霧島が先にアクションを起こした。

「……ゲイヴォルク、カートリッジロード」

『explosio』

西洋ランスの柄から薬莢が発射される。その行動に、次の霧島の攻撃に備えて俺は身構える。

「……吹きすさぶ雪」

凛、と霧島が俺達の故郷である地球の、それも日本の歌謡を口に

する……西洋ランスを手に持つて日本の歌謡を歌うのはなんというかアンバランスだよな……と苦笑してしまったが、近くにいた雄一が慌てた口調で俺に向かつて怒鳴り散らしてきた。

「バカ野郎！早くその歌を止めろ……！」

「は？」

いきなり何を　と思って俺はハツとした。
今は模擬戦の真っ最中。

この状況で戦闘に無駄な行動をする人間などいない。……さつきまでお前らやつてたじやないか、という言葉は無しな。頼むから。慌てて俺は銃口を霧島に向けるが、気付いたときには遅かった。
霧島はゆっくりと槍の先端を

「……安楽に導くは刹那の軌跡か」

『blizzard parade』

「ツツツツ……空気が爆ぜる音と共に、霧島が……こちらに向かつて突撃してきた。しかも、霧島が手に持つ槍の表面に氷が纏わりつき、ただでさえ大きな槍がさらに巨大になっていた。その状態で霧島は俺たちに向かつて突進してきた。

「なんだそりや……？」

思わずツツツツを入れてしまつたが、目の前に迫つてくる巨大な氷柱から逃げようと俺はとっさに空中へと逃げる。霧島の突進攻撃はそのまま俺の真下を通過していくが、あれだけ巨大な氷柱が間近に迫つていいく様は、俺に恐怖を覚えさせるのには充分だった。

なんだあの滅茶苦茶な魔法は！？などと口中で叫ぶが、危機が去つた事に内心少しだけ安堵していた……が。

「後ろだ！早く避ける！――」

「は？……のわっ！――」

『protection』

雄一に叱咤され、俺はとつさに障壁を目の前に展開せざる。

瞬間、障壁に巨大な氷の槍が突っ込んできた。

「ぐつ……」

ひやりとした感覚が体に満ちる。後数秒遅かつたら確実にやられていた。

内心、恐怖を感じつつ、なんとかそれに耐える俺だったが、目の前の紅い障壁と拮抗している巨大な氷の槍の持ち主である霧島は無表情のままだった。……むしろそっちの方に俺は恐怖を感じた。

しかし同時に違和感も覚えた。

先ほど、俺は確かに今の一撃を回避したはず。ならば、どこかで激突音が聞こえてもおかしくは無いはずだ。それなのに、霧島はそんな音を立てた様子も無く、俺に向かつて攻撃を仕掛けていた。一体どういうことだ？まさか方向変換でもしたっていうのか？

だがそんな暢気なことなど考えていられる状況ではなかった。俺の障壁に少しづつだが亀裂が入り始めた。このままでは後数秒も経たないうちに碎け散るだろう。

「くつ！ フォルト！――」

『 sonic move』

障壁を消し、高速移動魔法を使って槍からなんとか逃れる。

だがやはり少し無謀だったようだ。いくら高速で移動する魔法とはいっても、至近距離から高速で突っ込んで来る物体から逃れるのは少し無理があったようだ。槍がかすつた左腕を押さえて顔をしかめる。掠つただけでこの威力か…いくら非殺傷設定があるといつても、まともにくらえれば内臓がいかれる可能性があるぞ。

霧島がフェイトの隣で停止し、その場に留まる。おそらくは今魔法を説明しているところだろう…調度いい、この間に雄一とともに少し作戦を練つておくか。

「明久」

俺の安否を気にしてか、雄一が空中に飛んできて俺から一メートル程離れた位置で停止する。

「大丈夫だ…っていうか、霧島のあれは何だ？」

「あれは翔子の得意魔法、ブリザード・パレードだ…あいつは氷の魔力変換を持つててな、そいつを使つた魔法だ」

ブリザード・パレード…吹雪の行進、か。

猛スピードで突っ込んでくる長大な氷の槍の一撃…くらつたら確実にアウトだな。

さらに雄一は続ける。

「更に相手に攻撃を避けられた時、あいつは空中に氷の道を生み出して、その上を滑つて方向変換もしてくるようにしている」

成る程な。俺がさつきの一撃を受けそうになつた理由はそこか。
しかし空氣中に氷を生成してその上を滑つて体を反転させるなん
て無茶な上に肉体的負担もでかいはずだ…それをやってのける霧島
は化け物か？

「対抗策は無いのか？」

俺は今日が霧島との初戦闘だから、あいつの魔法に関して知識は
ほとんど無い。そうなると唯一知識がある雄一に頼るしかない。

「三秒でもいい、あいつの突進が止まる隙を生み出せないか？」

「出せる」

「う、平然と雄一は言つてきた。

一ヤリと笑みを浮かべながら雄一は堂々と宣言した。

「俺なら、あいつの動きを止めることができるものぜ」

「… どうか、なら俺は必ず霧島を仕留めるー！」

そして俺達はその作戦を念話で簡潔に決める。異端審問会の連中
から逃げ延びるには、土壇場でこのくらいのスピードで作戦をまと
めるくらいしないと生き残ることはできないからな。
時間にしてわずか三十秒。

それだけで俺達の作戦は決まった。

「頼むぜ、相棒」

「おう！」

告げると同時に俺達は動き出した。

雄一が戦闘を走り、俺がその後に続く

先ほどの喧嘩で、雄一との戦闘能力は大体把握できた……結果、俺は雄一よりも素早く動けることが解つた……とはいえ、一撃の強さなら向こうの方が上だけど……。

「來たぞ、明久！」

雄二の言葉どおり、俺達の前方から金色の魔力弾が俺達に向かって飛んできていた。俺は今までダブルセイバーだつたデバイスを元の状態…つまり、刀と鞘の状態に戻す。

「モード・ダークリパルサー！」

dark repulser

機械音声と共に、デバイスが双刃剣から刀と鞘に変形する。確認すると、俺は刀身を鞘に收める。

刀に魔力を込め、僕は魔力弾に向かって抜刀する。剣が魔力弾に触れた瞬間。

パン！といつ甲高い音を立てて魔力弾が霧散する。

続けざまに僕は次々と放たれてくる魔力弾を打ち消していく。

これが僕の真骨頂。AMとは違う、純粹に魔力そのものを打ち消すことが出来る僕のレアスキル『破邪』の力。この力を扱うのは、刀が必ず必要になる。その理由は、刀には魔を祓う力があると伝えられているのに関係しているらしい…詳しくは解らないけど。

刀に魔力を送ると、刀身は破邪の力を手に入れ、魔力で作られた
様々なものを切断する…といつても、実際に断ち切るには僕の腕次
第なんだけどね。まだまだ剣士として未熟だから、強い魔法　ス
ターライトブレイカーとか　は拮抗するのが限界だし、霧島さん
のようなベルカ式の魔法は純粹な実力勝負になってしまふから、こ
ちらが打ち負かされてしまうことだつてある。

最後の一いつを切断し、僕らは一気にフロイト達に向かつて接近するが、その前に……。

ゴツッ！再び爆発音が響き渡り、霧島さんが僕らに向かって特攻してくる。

先ほどの攻撃はおそらく時間稼ぎ。霧島さんのあの魔法は発動までそれなりに時間がかかるから、それを埋めるためにフェイトが放つたものなのだろう。……なんて考えているうちに、霧島さんが僕らとの距離を詰めてくる。

この一撃も僕の『破邪』で防げればいいんだろうけど…そんなことをすれば確実に僕の腕が悲惨な末路を迎える事になるだろう。
…それに、この魔法に対抗するのは僕じゃない。

「雄
—
！
！」

「イージス！！カートリッジロード！！！」

Explanation

雄一のトンファーから薬莢が飛び出し、雄一の魔力が一時的に跳ね上ると同時に、雄一は前に躍り出てトンファーを構える。

「アイギス・ウォール！！！」

雄二が叫んだ瞬間、雄二の前に壁のように巨大な魔力で形成された盾が現れる。見た目だけでも、充分堅そうなイメージがあるその盾は、霧島さんの槍の一撃を真正面から受け止める。

ゴガガガガガガガツツツツ！－！－！－！－！凄まじい激突音が響き渡る。――人の魔力が拮抗しているのだろう。青と紺色の一いつの魔力が辺りを照らす。

雄一と霧島さんは、いつもこの魔法で勝敗を決めているらしい……防ぎきれば雄一の勝ち。貫けば、霧島さんの勝ち。どちらが勝つかは一人の運と実力次第の大勝負……正直に言つて、悪友として見届けてやりたいけど……。

「行け！ 明久あーーー！」

! !

雄二に背中を押され、僕はフェイトに向かって一気に飛翔する。辺りが二人の膨大な魔力によつて目隠しされているせいか、フェイトは僕の接近に一瞬だけ反応が遅れる。

「フォルト！！」

『Explorion』

僕はカートリッジをロードすると、フェイトの前・十数メートル
ぐらい離れた位置で停止した。

フェイトは僕の行動に、首を傾げる。

「…どういっつもり、明久？」

警戒を含んだフェイトの言葉。

まあ、今のは確かに上手くいけばフェイトを確実に倒せたかもし
れないチャンスだ。それをわざわざ棒に振って、僕は一つの提案を
出す。

「フェイト、僕と決闘スタイルで勝負してほしい」

「…決闘スタイル？」

「うん」

頷くと僕は先ほど飛ばした後に、キャッチしておいた薬莢をフェ
イトに見せる。

「これを弾いて地面に落ちた瞬間スタート。お互いの最強魔法を放
つてどちらかの魔法が相手の魔法を打ち破つたら勝ち、っていう一
発勝負」

僕の言葉にフェイトは一瞬だけ、ポカンと間の抜けた顔をする。

その後に若干呆れが入ったような口調でフロイトは口を開いた。

「明久… 本当にどうこうつもつ？」

そう言つて今度はジト目で僕を見るフロイト。
さすがに本当の意味を言つわけにはいかない。……なんというか、
もの凄くこいつ恥ずかしいから。

「ただの気まぐれだよ」

「嘘でしょ」

『嘘やな』

『嘘でやー』

フロイトだけでなく、僕らの様子を見ているはやてやリインにまであつさりと看破される。さすが昔馴染み。八年経つても僕の事をよく解つてるみたいだ……なんかこれ以上言い訳を続けても無駄っぽいし、ここは正直に白状した方がいいかもしない。念話ではやてに聞こえなこよつにして、フロイトに語りかける。

「（実は…その……）」

「（？）」

「（なんか顔が熱くなつてきたぞ…でも言わないとなあ……。）

「（その…フロイトに向かつて剣を振りたくないっていうか…その、斬りたくないっていうか…）」

「え？」

「そ、その……模擬戦だってのは解ってるんだけど、それでも……その……僕は……フェイトを傷つけたくない。だから、今回だけでいいから、お願ひ

「明久……」

頬を染めたフェイトが嬉しそうに……本当に心の底から嬉しそうな笑顔を浮かべる。なんていうか、さつきまでちゃんと模擬戦をやるぞ！と思つてたんだけど、いざフェイトに向かつて剣を振ろうとしても、どうしても躊躇つてしまつんだよなあ……。

いつかは慣れないといけないんだろうけど（それも嫌だけど）、せめて今回だけはこの決闘スタイルで勝負を決めたかった。

『…………やれやれ、アキ君らしい理由やなあ』

「うわっ！？はやー！？？」

突然スピーカーから漏れてきたはやーの言葉に、僕は心底驚いた。なんで知つてるの！？

「明久、途中から念話で言ひのきられてるんだよ

「げっ！？」

えっ！？何それ！？？それじゃあ僕はあの恥ずかしい言詞をよりこもよつてあのイタズラ好きなはやーの前で堂々と言ひやつた訳！？！？わあ、最悪だ！！絶対にいじられまくる……

「バルティツシユ」

言うと同時にフロイトもカートリッジを一発、ガシャンとロードする……ということは。

「…ありがとうございます、フュイト」

「ううん。正直、明久の言葉はとても嬉しかったよ」

一
そ
づ
か

「でも次からはちゃんと戦ってね」

「ははは… 善処するよ」

アエリヤーの言葉に苦笑し、僕は薬莢を投げ飛ばす。

右を前にした半身の構えで僕は

右を前にした半身の構えで僕はフエイトを見据える。きっと彼女も全力で来るに違いない。僕は深呼吸をすると、一気に田を見開いて

「うべえーー！」

瞬間、僕の体は突然横から接近してきた霧島さんの突進によつて思いつきり宙を舞つた。

フロイト達の絶叫が、模擬戦会場に響き渡る。さあ、霧島さん？なん
んで……あつ。

意識を失いそうになつてゐる時だつた。地面にのびてゐる雄一の姿が僕の視界に入つてきた……ということは、今回は雄一が負けたのか。

ニヤリ。一矢を報ふに戰いだから、反則とは言わぬこトビ。

とっても釈然としない気持ちのまま僕は地面に倒れた。

明久&雄一 VS フェイト&霧島

勝者・フェイト&霧島ペア

『トマトアンド』

「ムツツリーーー… それは雄一に言つてるんだよね？ 僕に言つてるんじゃないよね？ 悪友の言葉に疑問を感じながら、僕は気を失った。

第六話（後書き）

レアスキル『破邪』

生まれながらに明久のが持つ能力。刀があれば、そこに魔力を送り込めば、全ての魔法を打ち消すことが出来る。しかし、魔法を断ち切れるかどうかは、明久の剣の実力次第になる。

もしかしたら次回から霧島雄一になつてゐるかもしだせんね。

「羅刹」

第七話（前編）（前書き）

田羅口編、前編です。

第七話（前編）

バカテスト・英語

以下の英文を和訳してください。

I'm fond of crime novels!

フェイト・T・ハラオウンの答え

『私はミステリー小説の大ファンです』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『私は推理小説の大ファンです！ ちなみに僕はホームズが好きです。特にボヘミアの醜聞や恐怖の谷や踊る人形……』

教師のコメント

正解ですが、裏面までびっしりとコナン・ドイルの作品のタイトルを書かなくても良かつたと思います。吉井君は最近少しずつ成績が伸びてきているので、大変いい傾向だと思います。ちなみに私は最初の作品、緋色の研究が好きです。

『』

教師のコメント

鼻血で回答がまったく見えませんが、君が何を想像したのかは容易に想像できます。

初夏が近づいてきた今日この頃。

今日は日曜日。全国の学生は基本的に休みの日の朝、日差しを浴びながら『俺』こと吉井明久は少しばかり緊張していた。

ん？僕の方じやないのか、って？

その理由を説明するには、昨日の事に振り返らなければならない。

（回想）

「デート？」

『うん、翔子と話し合って、それにしようと決めたんだ』

携帯電話から聞こえるフロイトの声に、僕は首を傾げる。

霧島さんに思いつきりぶつ飛ばされた後、一分ぐらい気を失つていた僕だつたけど、目を覚ました後に、シグナムとの模擬戦が待つてて、肉体的にも精神的にもボロボロの状態のまま、僕らは家に帰宅した。

しかしながらフロイトは僕の家に帰らず、『今日ははやての家に

泊まる』といつて、僕は首を傾げながら、それがなんなのか解らな
いまま、アルフと一人で夕飯を済まし、いざ寝ようとした時にフェ
イトから電話がかかってきた。

内容は例の模擬戦の罰ゲーム。

どちらかが勝つたら、負けた方に好きな事を一つだけ命令できる
という条件を賭け、僕らは戦つただけど、結果は奮闘空しく僕ら
の敗北。

そのことを知った雄一は『嫌だ…婿入りは嫌だ……嫌だあああ…』
と半ば発狂しけ、そのまま窓からダイブしそうだったので、慌て
て懐に護身用として忍ばせているスタンガンで雄一の意識を絶つこ
とでなんとか事なきを得た。

「それって…明日？」

『そりだよ、集合場所は…えつと、ラ・ペディス…だつけ?そこの
前で待ち合わせだよ』

「それはいいけど……だつたら同じ家から出た方が良かつたんじや
ないの?僕ら一緒に住んでるんだからさ」

同棲…もとい、ホームステイしている訳なんだから、わざわざ違う
場所から向かう必要なんてあるのかなあ?と思つてたら、電話の
向こう側から可愛らしい笑い声が聞こえてくる。

『ふふつ、解つてないなあ、明久は』

「えつ?」

どうじつ?と?

『デートでね、待ち合わせは大事なものなんだよ』

待ち合わせが大事なもの…そういうものなのかなあ？

でもフェイトが大事だというのだから、きっとそうなんだろ？…あつ、だから今日はわざわざはやての家に泊まりに行ってるのか。

デート…か。

姫路さんや美波と三人で出かけた時はある。けど、あれをデートといえるのかどうかは解らないんだよなあ…途中から清水さんが乱入して滅茶苦茶になつて、なぜか僕は女装する羽目になつたし、鉄人にはなんか変な誤解をされそうになつちやつたし…。

…やめよう。これ以上考えているとあの時の苦労が蘇つてくる…。

『それじゃね、明日だよ』

「あつ、うん」

通話が切れ、電子音がスピーカーから鳴り響く。携帯を充電器にセットしてからベッドの上に横になり、今日のことを少し振り返つてみる。

なのは達の報告によると、今日ヒネミーは出なかつたみたいだ。

それはいいことなんだけど、夜中に出てくる可能性が無いとはいえないから、僕の睡眠は基本的に浅いものだった。いつあいつらが出てくるか解らないから、正直結構キツイ日々だったなあ…けれど最近は少しだけどゆつくりとした睡眠をとれる日がある。

それはなのは達が来たおかげもあるから、交代制になつてからというもの、肉体的にも精神的にもかなり楽になつたから、正直に言えばかなり感謝している。

「あれ？」

ふと僕はやつひのフロイトとの会話を思い出した。

フロイト、待ち合わせの時間……伝えてないよな……。

僕の疑問に答えるように携帯が鳴り響いてきた。電話の着信音が若干ながら慌てたような音だったのは、多分気のせいじゃないと思う。

フロイトサイド

「じゃ、じゃあ、待ち合わせの時間は十時半だよ

息を切らせながら、私は明久に待ち合わせの時刻を伝える。あ、危なかった。危うく待ち合わせの時間を伝えずに眠るところだった……。

『了解。次からは忘れないよ』

「あう……」

明久の言葉に私は思わず言葉を詰まらせてしまった。
うう、私ってばいくら明久との初デートだからといって少し浮かれすぎてたかも……。

『それじゃあね、フロイト。明日は楽しみにしてるよ

「うんー！」

通話を切り、はやでが用意してくれた布団の上に横になる。
頬が、熱い。

きつと今の私の顔はもの凄い笑顔で、きつと顔色は真つ赤なんだと思う。

……無理もないよね、だつて私にとつて明日は初デート。なのは達と一緒に明久と出かけたことは何度も会つたけど、一人つきりで出かけるなんてことは今まで一度もなかつた。

……少し緊張してるけど、それ以上に私は明日どんな風に明久と一緒に過ごしあうか、とても楽しみだつた。

本当は現状を考えると、そんな暢気な事を考えている場合じやないのだと思うけど、そんな中で、いつした平穏で幸せを感じることに、私は愛おしさを感じていた。

胸の中に暖かなものを感じながら私は眠りに付いた。
だからこそ、私はこの時気付かなかつた。ドアの向こうで私を覗く瞳に……。

明久サイド

「……早く起きすぎた」

現在の時刻は四時半ジャスト。

まだまだかなり余裕がある時間帯だけど、もしかしたら寝過ぎす可能性があるかもしね、などと考えてしまつととても一度寝なんてできなかつた。

ベッドから下り、僕はパジャマを脱ぎ捨てると、ジヤージに着替える。

じついう時は体を軽く動かして時間を潰すのが一番。そう思った僕は長年愛用している鞄に納まつた木刀を持つと、部屋を出ようとするアノブに手を伸ばす。……その時、ふと部屋の隅に置かれていた長年愛用してきた『あるもの』に気がつく。

そういうえば、エネミーが出てからあまりあれを使ったことはないような気がする……久しぶりに使ってみようかな?と思つたけど、アルフが寝ているので、あまり大きな音を立てる訳にはいかないし……アンプとヘッドフォンを使えば……いや、それでも狼の使い魔であるアルフのことだからきっと耳に入つてくれるだろう……しうがない、これ エレキを弾くのはまたの機会にするとしよう。

僕は後ろ髪を引かれるような思いで部屋を後にした。

朝早く公園にたどり着く。

そこでは既に早起きのおじいちゃん、おばあちゃんが集まつて太極拳のよつなものをやつていた……健康のためにやつているんだろうけど、太極拳って実は残酷な必殺技のオンパレードなんだよね……例えば首をねじ切る技とか……っと、朝からこんな物騒な話題はやめておこう。

おじいちゃん達に短い挨拶を交わした後、邪魔にならない場所に移動すると、僕は木刀を手にし、一息で鞘から抜刀し、大気を切断する音を響かせる。

それを何度も繰り返すと、僕は昨日の模擬戦のことを思い出す。昨日初めて知つた雄一と霧島さん、そしてムツツリー二の戦い方。雄一は近距離、遠距離、どの方面から攻められても対応できるような戦い方をし、さらに鉄壁の防御を誇る技を駆使してくる。近距離に踏み込めばトンファーを自分の腕のよつに自在に操つてこちらの攻撃を捌き、遠くから砲撃魔法を放てば頑強な防御魔法を使つて防ぐ。こちらの攻撃を防ぎきつた後は、強烈なトンファーでの一撃、あるいは「」に変形させての遠距離攻撃を仕掛けてくるという、オールラウンドな戦い方をしてくる。

霧島さんの戦い方は、最初ヒット＆アウェイの戦い方をするものだと思ったけど、そうじやなかつた。

巨大な槍を使っての突進による圧倒的な特攻。槍を使っての遠距離からの投擲。これらだけでも充分脅威だというのに、霧島さんは巨大な槍を使って、まるでマシンガンのような連続突きを放つてくれる…と、後で映像データを見て知った。

一見すると防御をまったく考えていないように見えるけど、氷の魔力変換を使って、防御壁や空中での高速移動の補助などをして弱点を補っている。

多分だけど、二人とも様々な場面を想定し、自分の力をどんな場面でも生かせるように工夫しているんだと思う……さすがクラス代表。ん？それは関係ないって？知らん。

最後にムツツリーー。

ムツツリーーのデバイスはライフルで、それを使っての精密射撃がムツツリーーの得意分野……らしい。詳しくは解らないけど、多分かなりの腕前なのだろう。

いずれにせよ、三人ともかなりの実力者。

僕も遅れを取るわけには行かないの、今日は普段やらない攻撃方法…居合いをベースにした戦いではなく抜刀した状態での攻撃を練習してみようと思った。

「ふつ！」

鞘から抜き放ち、『俺』は刀身を水平にするように構える。

普段、あまりこちらの俺にならないようにしている理由は一つ。突然性格が変わったことによって、戦闘中に味方の動搖を防ぐ事にある。

戦闘とは、常に集中力との勝負になる。わずかに集中力が乱れる事によつて、それが敗北につながる事だって充分ありえるからだ。だからこそ、俺は出来る限り剣を鞘に納めた状態で戦う事を自分に課してきた。

だが恐らくこのままではダメなのだろう。

戦闘とは常に変化するもの。様々な場面で的確に動けてこそ、戦闘を優位に運ぶ事が出来る。

呼吸を整え、目を閉じる。

視界を閉じる事により、自己への意識を向けやすくしていく。

キイイイイイイイイ

。

思考が、加速する。

周りから、雑音が遠のいていく。

最初は人の声が。

次は朝の街中の喧騒が。

次は鳥の声、草木の音、風の音、次々と俺の周りの音が聞こえなくなつていき、最後に残つたのは、トクントクンと一定感覚のリズムを刻む俺の心音と呼吸によるブレス音だけになる。

これで完全に俺の意識は外界とは遮断された。

イメージする。

相手は昨日戦つた雄二。

トンファーによる堅強な防御、そして隙を見つけ出した瞬間に放つてくる攻撃。距離を取ると放たれる正確無比な弓矢による一撃。目を、開ける。

視界に入つてくるのは、先ほどの公園だが、一つだけ違うところがある。

それは俺の目の前には、自分の想像で生み出した仮想の敵がいるというところだ。雄二の姿を型としたんだが、全身が黒子のように真っ黒で、その手にトンファーを装備し、肩の辺りに無数の矢が入っ

た筒を背負っていた。

イメージとしてはトンファーを扱う『兵』といったところか。……実際にそんな武器を使ってくる『兵』がいたら笑いものだな。

目の前にいる雄二の全身が黒いのは、おそらく俺がこれを雄二ではない、と否定しているからだろう。

俺と雄二が戦い始めてまだ日がそこまで経っていない。

お互いの戦闘スタイルがそこまでハッキリしている訳ではないから、正確なイメージとしてこの場には現れていないのだろう。だからこそ、相手が雄二の姿をしていても、全身が影のように黒い。だが今はこれだけで充分だ。

慣れてない剣を扱う身としては、このくらいが相手として調度いい。

剣を顔の横に水平にするように構え、右足を前へと軽く開く。

「つ！」

一息で一気に接近する。

上段から首元へ狙いを定めた横薙ぎの一撃。しかし相手はその一撃をトンファーで防ぐ。

ガキン！！仮想の撃鉄音が脳内に響く。

腕には防がれた手応えはないが、俺の感覚では、今の一撃は確実に雄二なら防いでいると理解しているせいか、防がれた瞬間には俺の腕は一瞬だが仮想のトンファーによつて動きを止められる。そして、俺の動きが一瞬だが止まつた瞬間に仮想の雄二は俺に向かってトンファーを突き出してくる。俺はとっさに体を後方へと反らしてギリギリ鼻先をかするような形で避ける。だが雄二は避けた俺にさらに追撃を仕掛けてくる。俺は半ば地面を転がるようにして猛攻の嵐から逃れるために一度距離を取る。

瞬間、仮想の雄一の武装はトンファーから「へと変わり、矢を弓に番えて仮想の雄一は次々と俺に矢を発射してくる。

その攻撃から逃れるために…俺はあえて雄一に向かつて踏み込んだ。

弓から矢が発射されるタイミングや位置を、相手の視線や、体の動きを見てから判断する…視線は俺の眉間に向けられていた…そして相手の矢を持つ指が微かに動いた瞬間、俺は右手を閃かめた。バシッ！という音と共に眉間に向かつて飛んできた矢が粉々に打ち砕かれる。

ナイフ、と脳内で自分に賞賛を贈ると同時に俺は次々と放たれていく矢を右手で次々と弾き飛ばしていき、仮想の雄一に一気に接近していく。

剣に魔力を込める　当然、これも想像だが　刀身に魔力が送られ、剣が紅く光りだすと同時に、地面を踏み碎かんばかりに一気に加速して仮想の雄一の胸の中央に直突きを繰り出す。

星流一閃。全力の加速を使って相手を貫く技だ。

その一撃は見事に仮想の雄一の胸板を貫くことが出来た。剣は根本まで貫通している。確実に俺の勝ち…と解った瞬間、仮想の雄一の体は霧のように霧散した。

周りの情報が、戻ってくる。

風の音が、周りの喧騒が、俺の脳へとダイレクトに送り込まれ、あまりの情報量の多さに俺は軽い眩暈を起こしてその場に座り込んだ。

「……なんとか、勝てたか」

汗が頬を伝い、ジャージの袖でそれを拭う。

今回はまだ俺のイメージが不完全だったからこそ、なんとか勝つ事が出来た。

もし俺のイメージがもう少し精密だったら…あるいは現実で戦つ

ていたりすれば…高確率で雄一が勝つていたに違いない。最初から居合いをベースにした剣術で戦つてしたりすれば、それなりにいい勝負をしただろ？。

やはり俺は居合いで戦い方に慣れすぎていた。

別にそれは悪い事ではないのだが、鞘に剣が納まつていらない感覚に違和感を覚えているせいか、どこか体の動きがぎこちないと感じる。しばらくの課題はこのぎこちなさをなくす事に専念することになるかもしれない。

そこまで思案した時、俺の頭に白くてふわふわとした柔らかい布が被せられた。手でそれを取つてみると、それは汗拭きタオルだった。

「……？」

訝しげにそれを見ていると、肩をポンポンと軽く叩かれる。振り返つてみると、そこにいたのは俺の悪友…一見すると美少女のようになしか見えない美少年（？）秀吉だ。

「おはよひじや、明久」

「おはよ…って、なんだこりんな朝つぱらに公園にこるんだ、秀吉？」

「毎日の日課で、ランニングをしておったのじゃ。やつちはひつたのかの？」

「今日は早く起きすぎてな、体を動かそつと剣を振つていただけだ」

……ん？なんか違和感が…。

秀吉は俺の隣に座ると、俺の手の中にある木刀を見てから言つた。

「先ほどの相手は、お主の動きから察すると……トントンフターと遠距離系統の武器……となると、雄一かの？」

「ん？ ああ。と言つても完全にあいつのリズムを完璧に捕らえている訳じゃないから、レベルがあいつと比べて低くな……ん？」

またしても違和感……とこいつか。

秀吉……お前、なんで雄一の戦闘スタイル知つてるんだ？…………ヒカルまで考えた時に俺の思考は一つの結論に達した。

「…………なるほど、お前も魔導師とこいつとか」

ため息を吐きながら俺は頬杖をつく。

秀吉は少しだけ驚いた顔をする。おひ、結構珍しいな……こいつが驚いたような顔になるのつて。

「なぜ解つたのじや？」

「雄一の戦闘スタイルを知つてるとこいつからだ

「じゃが、それだけではわからんじやろ？ 他にも理由があるはずだ
や」

「まあ、たしかにあるけど……とつあえず、今一番の理由として
は……。

「……最近、結構身近な人間が魔導師だったっていうのが多かつたか
らな」

「…………なるほどのう」

口ではせう言つてゐるが、実は結構さつきからヒントはあった。

「ヒントじやと？」

「ああ」

俺は秀吉に俺が気付いたヒントを教えてやつた。
まず最初に秀吉が俺の剣の腕を見ても驚かなかつたところ。あれ
は多分最初から俺の使う魔法を知つていたからだろう。さらに性格
が一時的とはいえ、変化している知り合いに、普通に話しかけてき
たところから推測すると、おそらくマッツリー二辺りから聞いた事
なんだろうな。

雄一は俺が魔導師だということを知らなかつたみたいだし、そう
なると諜報活動に優れているマッツリー二が魔導師だったのなら、
そこから味方である秀吉に伝わるのにそれまで時間はいらないだろ
うからな。

「お前が魔導師つてことは、姉の方…木下優子も魔導師なんだろ？」

「そうじや…といつても、姉上の魔法はあまり戦闘には向いてあら
なんだ」

「現場は弟で、姉は会議室タイプつて感じか？」

半ば冗談のつもりで言つてみたのだが、秀吉は俺の言葉に苦笑す
る。

「お主の予想通りじやよ。現場での捜査はわしで、姉上は部署の方
とこつた役割となつておる」

……マジで当たるとま思わなかつた。

正直に言つと、新学期の試験戦争で秀吉が姉に連れて行かれてそのまま戻つてこなかつたところから、俺は木下姉もそれなりの実力者だと思つていたんだが……どうやら、弟が姉に苦労するのも同じの家でも同じことのようだ。

「……しかし出会いから数分でそこまで解るなど、凄い推理力じゃの」

「まあ、推理の事に關してはな」

……これが少しでも勉強の方に向けられるのなら嬉しいのこ……と俺は少々、自嘲も混じつたため息を吐いてしまつ。

「しかし本当に性格がガラリと変わつておるの?」

「まあ、これもマッソリーが雄一から聞いたことなのかな?」

「つむ、マッソリーが教えてくれたぞ!」

「なるほどね」

「……この情報の出所はやつぱりマッソリーか……まあ、ある程度予想はしていたけど。とりあえずいい機会だからついでに色々と聞いておこう。」

「秀吉、とりあえず質問いいか?」

「む? それは構わんが……どうしたのじゃ急に?」

「まあ、色々とね…といつあえず質問1だ」

「むひ？ 一つではなこののかの？」

「ああ、一つ目だけ…今現在、この街に来ている魔導師は俺達以外に知っている奴はいるか？」

「ふむ…といつあえずはわしが知っている中ではまだないがさすじや」

「その理由は？」

「わしとマジックリー|サリッシュ田舎での、家族は全員回りのまわ

「ふうん…となると、お前も『あれ』を調べるためにこるのか？」

「あれとは…Hネリーの」とか?「それとも…」

「Hネリーじゃなこほひだな」

「ふむ…なるほど…じやがなせわしらは…」

「あー…その件についてはまた後でこいつ

そう言つて俺は無理やり話題をかえる事にする。

管理局から別々の部署で送られてきた理由の訳なんて、どうせへだらない答えが返つてくるのは間違いないだろう。

「一つ目の質問だ。お前のデバイスを見せてくれないか?」

「よこぞ」

やういづと秀吉は手首に巻いている琥珀色の宝石があしらわれた
チーンプレスレットを見せる。それを確認すると、俺も首に下げ
ている紅い宝石が装飾されたデバイス、フォルトを見せる。

「これがわしの『デバイス、クラウソラス』じゃ」

……なんでケルト神話のヌアザが持つている武器の名前が付
けられてるんだよ。

「お前も剣を使うのか？」

「剣？いや、わしが扱うのはナックルじゃが？」

……なんで剣の名称が籠手についているんだよ。

思えば俺の周りのデバイスの名前にも、結構こっちの世界の神話
に出てくる名前が使われるんだよなあ……クロノの『デュランダル』と
か、シグナムの『レヴァンティン』とか、雄二の『イージス』とか……。

そういうや、霧島のデバイスもゲイヴォルクっていう名前だつたな
……多分あれはケルト神話のボルグ・マク・ブアイングが作り、後に
クー・フーリンの手に授けられた「心の臓を喰らうもの」という名
前を持つゲイ・ボルグからとつたんだろうな。

……まさかとは思うけど、槍での超投擲魔法……なんてのを身に付
けているんじや……などと一瞬、無表情のまま槍を投擲する霧島の姿
が目に浮かび、背筋に寒気を覚えてしまった。

『明久様、明久様』

「ん？どうしたんだ、フォルト？」

『急いだ方がいいですよ、現時刻、九時です』

「げつ……」

やべえ……ちょっとのはずだったのに、すっかり時間を忘れて訓練と秀吉との会話に夢中に時間を忘れていたみたいだ。

「悪い、秀吉一話の続きを学校でな……」

「う、うむ」

そのまま俺は一気に家へと駆け出し、腹を空かせているアルフに適当に朝ごはんを作り、シャワーを浴びた後、服を着替えて財布と携帯を持って外に出かけたのだった。

それから今現在に至る。

慌てていたせいか、鞄を公園に忘れていい、今も抜刀状態の性格のままだった。

ガラスに映る自分の姿を見て、少しながら自己嫌悪する。

黒生地のシャツにワインレッドのノースリーブフードパークーを羽織り、ダークブルーのゆつたりとしたジーンズというデートにしては少々ばかりラフすぎる格好をしていた。

もうちょっととマシな格好にすれば良かったのではないか、と今更ながら後悔の念に襲われ、俺はため息を吐いた。

「…………」

本当はデータをやつてる場合ではない。

俺達は死人が出ている事件にかかわっている……それも、一年といつ長い時間かけてこの事件を追っているのだ。

この街に潜んでいるエネミーという謎の怪物。そして……その背後に潜む人間。

黒い思惑が潜むこの街で、俺達は必ず見つけ出して捕まえなければならぬ……時空管理局執務官として。

「……やつこえば、結構苦労したつけな」

執務官試験にはなんとか一発で受かる事が出来たけど、それまでの勉強がとにかくしんどくて大変だった。おそらく、今までの人生の中であそこまで必死に勉強したのは初めてであろう……まあ、試験が受かったあの日以来、勉強なんてやってたまるか！…と思つてまたく勉強をしていなかつたせいか、通常の基本的学力が一気に低下していたりする。

そのことに自嘲気味な笑みを浮かべ、背中を壁に預けて空を見上げる。

本日は見事なまでの快晴。

色々と気がかりな事はあるが、たまには体と心を休ませる日だってあつてもいいのかもしれないと思いつつ、先ほど買った缶コーヒーを口に含みながら俺は本日のメインヒロインを待つ事にした。

第七話（前編）（後書き）

今回から秀吉も魔導師として参戦するので、戦闘パートまで楽しみに！

ちなみに、彼以外の魔導師は登場する予定は今のところないです。

第八話（中編）（前書き）

今回は、前半が少しだけシリアスです。

第八話（中編）

管理局アンケート

どのような訓練が必要なのか、みなさんの意見を取り入れてみよう
と思いますので、ご協力ください。

『あなたが戦闘に必要なものをお答えください』

吉井明久の答え

『信頼』

教官のコメント

『チームプレイで最も必要なものですね。仲間との連携はどのよう
な場面でも必要なものなので、この回答はとても参考になります』

土屋康太の答え

『セクシー：女性戦闘員のバリアジャケット強化』

教官のコメント

『最初に向を書いたとしたのですか？』

坂本雄一の答え

『いのちだい 霧島翔子』

教官のコメント

『途中で文字が途切れ、血が張り付いているのが気になります。』

桜色の花びらが徐々に姿を消していき、逆に新緑が木々に彩り始めてきた季節。

そろそろ半袖の季節かな?と暖かさが増してきた初夏の日差しを体に浴びつつ、俺は手にした携帯で時刻を確認する。

「……もうそろそろ、か」

現在の時刻は十時半になる数分前。待ち合わせの時間まで余裕はあるが、俺はせっかくの初デートだから、待たせるわけにはいかないと思って余裕を持って家を出た。

はい、嘘です。本当は時間をあまり確認せずに家を出てきてしまつたので、待ち合わせの五十分前にここに到着していたというだけです。若干ながら自己嫌悪。

ため息を吐き出しつつ、彼女がここに来るまで、退屈を紛らわせるために俺は懐のメモ帳を取り出して思い浮かんだメロディフレーズを書き込んでいく。

「君と作った…………口ずれる…………響かせる」

俺は数年前からギターを愛用している。

どうもロストロギアを取り込んだ影響のせいか、音楽で非凡な才能を發揮させてしまい、小遣いを貯めてエレキのテレキャスター、アンプ、ヘッドホン等を購入し、さらに自作の歌詞を作つてみたりしていた……といつても、完全に趣味だから別に全国でヒットを目指そうなどという事は考えていない。

それに、俺の目標は別にある。

音楽はあくまで趣味だから、誰かに聞かせてあげたり、聞いてもらつたりするだけで充分だ。最近では、フェイトやアルフ、たまに遊びに来るなのはや雄二とかにも聞いてもらっている。

音楽は楽しい。

そのことに気付かせてくれたのなら、これが俺の中に入っていることに感謝できる。

だが

「…………」

俺の中にある……このロストロギアの力は絶大だ。

下手に開放すれば俺自身が死に掛けない力すら有している。

このロストロギアの力を一度だけ使ってみた経験があるが、あれは異常だった。

一撃。

その一撃は音速を超えて放たれ、海面を引き裂き、海を……西断した。

あまりにも、異常な一撃。

そして。

俺は思わず左肩を握り締める。あの時の激痛が記憶に蘇り、それが仮想の痛みとして、襲い掛かってくる。

これは俺にとつては一種のトラウマだ……。
たつた一度。

たつた一度使つただけで自分の体がボロボロになる威力だつたなんて……

幸い命は取り留めことが出来たが、三ヶ月の間、自分で体を動かす事がまったく出来なかつた。

「…………」

左肩に触れてみる。そこに今でも残つてゐる傷がある。

「フォルト……いや、キャリバー……俺はまだあれを使いこなせないのか？」

『……今の明久様ではおそらく、不可能でしょう』

「だよなあ……」

予想していた答えもあるのだが、俺はまだまだ弱い自分に対する嫌悪と、まだ使えないのかという焦燥と、そして 使わなく ていいと思つて安堵して いる自分がいる。

暗鬱とした気分になり、ため息を吐く。

あの力はたしかに強力だ。

だが同時に凶悪である。

誰かが手綱を掴んでいなければいけない。

その誰かはもう決まつて いる。

だがそいつはまだ手綱を握つて操るどころか、握ることすら難し

い。

「…………でも、握らなきやいけないんだ」

握りたくない！

言葉とは裏腹に、俺の中では拒絶の叫び声が響いた。

「どうしたの？」

突然響いた言葉に、俺はびっくりと体を震わせた。虚空を見つめていた視点がゆっくりとクリアになってきて、焦点が戻ると、その先には不安げな表情を浮かべたフェイトがいた。

「あっ、お、おはよ。フェイト

「うん、おはよ……」

頬を指でかきながらフェイトと挨拶をかわす俺。出来る限り、不審に思われない行動を取つたつもりだったが、どうやら逆効果だつたらしく、フェイトは気遣わしげな表情を浮かべていた。

「どうしたの？」

「…………

再び同じ質問が彼女の口から響くが、俺は答えることが出来なかつた。

俺の中にあるロストロギアは強大な力を有している。その力は使つた張本人ですら死に掛けるほどの絶大な破壊力を持つているのだ。もしそれが彼女達に猛威を振るつとなつたのなら、俺は……。

ヤメ口！！

心が、叫ぶ。

だが俺の思考は止まらない。

連想、してしまう。

力を発動した自分。周囲に満ちる、膨大な魔力。次々と葬られてい
くエネミー達。その余波で全身から血を溢れ出させる、俺。
そして……俺の放った力によって引き起こされる最悪な……
ふいに頬に温かな手が触ってきた。

「え？」

「どうしたの？本当に、大丈夫！？」

フロイトが不安そうに俺に言葉を投げかける。
この顔に触れている温もりが、彼女の手だと気付いたときには、
思わずその手を握り締めていた。

ゆっくりと、顔を動かしてガラスに映る自分の姿を見る。
そこには……まるで恐ろしいものでも見てきたかのような、なんと
も情けない顔をしていて、さらに女の子の手に見つとも無く縋り付
いている惨めな自分が、そこにいた。

「何か、あつたの？」

「……」

言葉で答えず、俺は黙つて首を横に振る。

これはただ自分で勝手に巻き起こした結果だ。勝手に妄想し、勝
手に恐怖し、勝手に彼女達を空想の中で殺してしまっているだけの
話なんだから……。

だから、本来ならこんな風に彼女の手に縋る権利なんて俺には無
い。

無い、はずなのに。

彼女は優しく俺の右手を両手で包んでくれた。

虚脱した体を動かし、ゆっくりと彼女の顔を見る。

そこには、慈愛の微笑を浮かべた同い年の少女がそこにいた。

「 、 」

その表情を見ているとスウ、と俺の中で蠢いていた得体の知れないドロドロとした感情が薄れしていく感覺がした。

「『大丈夫、この手は僕がずっと握っているし、絶対に離すことなんてい』」

「……」

ふいに彼女の口から放たれた言葉に、俺は驚愕した。

その言葉はかつて俺が彼女に向かつて言つた言葉だった。

「八年前、私が母さんのところから帰つてきたとき……ボロボロだった私の体を明久は抱きしめて……それから、手を握つて言つてくれた言葉だよ」

「……………そついえば、そだつたな」

あの時、母親の元から帰つてきた彼女の姿があまりにも痛々しくて、彼女に問い合わせても答えてくれなくて……そんな彼女に俺は今にも壊れそうな彼女の体を優しく抱きしめ、その手を握つていた。

「なんだか、今の明久を見ていると……昔の私を思い出してね……それで」

「『僕は君のことは何も知らないけど、何も知らないてもいい。だ

けど』「

「…」

気付いたら、あの時の言葉の続きを口にしていた。記憶の彼方にあった言葉のはずなのに、不思議とすらすら言葉に出来た。

「「君の傍において、君を支える」」

特にタイミングを合わせているわけでもないのに、俺達は同じ言葉を同じタイミングで言った。たったそれだけの事が、今の俺にとってかけがえの無いと思えるほど嬉しい事だった。

俺の心に恐怖感は無かった。

変わりにあるのは、暖かくて心地良いものだけだった。

「ありがとう、フハイト」

「うん、どういたしまして」

そつと、ガラスを見る。

そこには先ほどの惨めな自分ではなく、いつも通りの笑顔を浮かべている吉井明久がそこにいた。

やれやれ、何をやっているのや。ひ。

せつかぐの『デート』だって言つのに、最初からこれじやあ前途多難だな。

「せつかぐの『デート』なのに、こきなり迷惑かけてごめん」

「ううん、大丈夫だよ…それより、もう大丈夫なの?」

そう言つて不安げな表情を浮かべるフェイトだつたけど、俺はその頭を少し乱暴に撫で回してやつた。

「ああ、甘えん坊の魔法使いが俺を癒してくれたから問題なしんだよ」

「あ、甘えん坊！？」

心外だ、と言わんばかりの表情を浮かべるフェイトだが、実際彼女は結構甘えん坊な節が多くある。俺はその表情を見て、ニヤリと笑う。

「あー、悪い。甘えん坊だけじゃなくて、寂しがり屋に怖がりでもあつたなあ！」

「あ、明久あ！」

顔を真っ赤にしてフェイトはパタパタと手を振つてくる。
してやつたり、と心の中で思いつつ、俺は腹から込み上げてくる笑いをこらえつつ、恥ずかしがつてゐるフェイトを見る。

やれやれ、お互いまだ子供だなあ。

先ほどフェイトに情けなく縋り付いてしまつて、それが……なんというか、恥ずかしく思えて、思わずフェイトに意地悪をしてしまつた……向こうの俺はこんな意地悪をせずには、もつと優しい……別のことをしてやつてゐるのだろうけど。

むくれ顔になつてゐるフェイトの頭をポンポンと撫でてやると、突然するつと俺の腕に自分の腕を絡ませてきた。

突然の事に、俺はビクン！と体を一瞬だけ硬直させてしまい、それが彼女の狙いだつたようで、彼女も先ほどの俺のよつとしてやつたり、と笑みを浮かべていた。

「もう本当に大丈夫そうだね

「ああ、それじゃあ行こうぜ」

「うん…」

そのまま俺達は歩き出した。

しかし後々に俺はこの時気付いておけばと後悔している。
背後から俺達を覗き見る不振な影に……。

はやてサイド

おお、なんかええ雰囲気になつたで！

最初はアキ君がどこか不安げな雰囲気を出していたみたいやけど、
今はそんな雰囲気なんてなぞやつやな。うーん、初々しいカップル
つちゅうかんじやな。

「はやてちゃん」

「はやで～」

「…………はやで」

「なんや～」

後ろからなのよちやんといヴィータ、康太君がジト目で私を見詰め
てくれる。

けれど私はそんな視線を容易く受け流し、ニヤリと笑う。

昨日のフロイトちゃんは、傍から見ても解るくらい拳動不審やつたし、夜寝る前、私はしつかりといの耳で聞いたんや……フロイトちゃんがデートの待ち合わせをしたるとこ「う」とこ！

「ふふふ、フロイトちゃんとアキ君の初デート……しつかり見させてもらひついでー！」

「正直、私は気が乗らないよ～」

「あたしは興味ねえんだけど」

「…………他人の幸せを見るのに興味なんてない」

などと口々に文句を言つてゐなのはちやん達やけど、私には解る！
ヴィータは本当に興味無せそつやけど、なのはちやんはさつきからチラチラとアキ君とフロイトちゃんの様子を見て、フロイトちゃんが幸せそうな顔をしたり、アキ君が笑顔を浮かべていたりするところを見ると、につこりと笑顔を浮かべておるし、康太君は普段からその手に常備しておる「デジカメ（ミニデジ製）で普段は見られないのはちやんや、フロイトちゃん、つこりに私とヴィータの私服姿をしつかりとデジカメで撮影してこるつちゅつじとぐらいお見通しや！

康太君に念話で話しかける。

「（ビヤ？普段見られない表情を浮かべておる美少女を撮影する機会なんてめつたにないや？）

「（…………なんのことか、解らない）

「（せいか、なじまーせー、ペラリッ..）」

「アガル！」

なのはちゃんと穿いてあるスカートを少しだけはためかせただけでこれか…康太君てほんま純情やなあ。そのまま息絶え絶えな状態の康太君に

「（康太君、分け前はきつちり用意するんやで？）」

（約束せらる） 繩十とつて、

鼻血を流しておる紳士はどうかと思つたけど、細かいことは気にしないほうがええな。

さあ、一人かどんなアートをするか…きこむから見せてもらひて

.....なんて思つとたら、遠くから何やら騒がしい喧騒が聞こえ
てきた。

『み、美波ちゃん！見てください、吉井君が…！』

『へつ！？あつー、アキの奴、何やつてるのよー。』

あれは…瑞希ちゃんに美波ちゃんやないか。なんや、二人とも街に出かけてたみたいや。

それにして…アキ君も隅に置けんものやなあ。まあ、アキ君

つて結構天然な女たらしのところがあるから、無理もないけど。

『ああー今、フェイトちゃんが吉井君の腕に思いつきつぎゅうと抱きつきましたよー?』

『何ですかー?』

やれやれ、街中で大声出すなんて……いくら驚いていたとはいえ、少しほマナー一つもんを考え……。

『瑞希ー!』

『美波ちゃんー!』

『『今すぐ吉井君を殺りにこきましょつ(こくわよ)ー!』』

「「「ちよつーんまつーーつてえ
ー!ー!ー!」」

あまりにもふつ飛んだ言葉が耳に届き、私は声にもならない叫び声を街中で上げてしまつた。

映画館

駅前にある映画館。

雄一や姫路達と何度か足を運んだことはあるが、こうしてテートとしてここに来るのは初めてで、少しだけ緊張してはいた。

とはいえ、それをフェイトに察すられるなんてことはしなくてよ
に、俺はさつさと話題を振る事にした。

「フェイトは何が見たいんだ？」

「うん、実はね前々から決めていた映画が……」

なんてそこまで彼女が言つた瞬間だった。

俺とフェイトは目の前の異様な光景を見て固まってしまった。
いや、固まっているのはおそらくフェイトだけだろう。俺は一度
田だからなんとかすぐにフリーーズから脱出できたが、やはりこの光
景からはどうしても田を逸らしたくなる。

そのままフェイトの手を引いてその場から離れようとしたら、向
こうが一歩前に気付いてしまった。

くつ……もつと早く俺がこの場から離れていれば……！

「よっ……明久……」

「お、おう……雄一」

「……お早うフェイト、吉井」

「お、お早う……翔子」

鎖が繋げられている手枷を両腕にはめた雄一と、その鎖を握つて
至福の笑みを浮かべている霧島が、俺達の目の前にいた。よく見て
みると、雄一は先ほど俺よりも酷い表情を野性味が溢れた顔から
浮かばせていた……こいつがこんな顔になるなんて……一体何があつ
たのか、怖くて聞けねえ……。

「雄一……大丈夫か？」

「……男とは……無力だ」

「……」今まで憔悴しきつてゐる人間を俺は今まで見たことがない。

「……雄一、何が見たい？」

「give me freedom」

直訳すると自由を下さい、か……同情の念が俺とフュイトから伝わってきたのか、気まずそうに雄一は俺らから目線を逸らしていた。対して、霧島はとくとうと……。

「……そんな映画のタイトルはないけど……」

THE・天然スル。

前々から思つていたが、霧島つて結構天然っぽいといふあるよな。雄一関係で。

「……じゃあ、とある禁呪の默示録・完全版」

「待てそれ、四時間五分もあるぞ……」

「……一回見る」

「八時間十一分も椅子に座つてられるか……」

どんな耐久拷問だ、と思つた時と霧島が次の行動に出た瞬間が同じで、俺は次の言葉が言えなくなつた。

「……大丈夫」

バチバチャー！！

霧島が懐からスタンガンを取り出し、それを雄一の首元に情け容赦なくぶつけた。辺りに雄一が浴びせかけられている電撃の閃光が飛び交い、周囲を照らしていた。

「ちょっと待て、翔子お

づあ…………」

『坊ちや

ん…………』

雄一はしばらく電撃にもだえ苦しんでいたが、奇声を上げてその場に倒れこんでしまい、こいつのデバイスのイージスがマスターを思つて叫ぶが、雄一はその声に反応する気配を見せずに力無く床に伏せていた。

「……じゃあ、二人とも」

「おひ、おう」

「うひ、うん」

グイツ、ツカツカ。

霧島は糸が切れた人形のようになつた雄一をカウンターへと連れて行く。どうでもいいが、誰もこの状況につっこみをいれないのは何故だ。

「……学生一枚。一回分」

「はい、学生一枚、気を失つた学生一枚、無駄に二回分ですね」

笑顔でスルーする店員。いや、せめてひとつこめよー。客の状態がおかしい」とぐらりと描きしろよー。専業スマイルもいいけど、非常時までスマイルでいらっしゃうじつとしては迷惑以外の何物でもないからさー。

「　　」
　　」
　　」

恐るしきかな、霧島ハリケーン。

先ほどまで騒がしかったのに、それが過ぎ去つた空間では微妙な空気が漂い始めている。

「行こうか……フロイト」

「う……うん」

顔が引きつっているフロイトの手を掴み、俺はむさつひと映画を見てこの微妙な気分を払拭することにした。
せつかくの初デートなのに、色々前途々難ずるが。

はやてサイド

「な、なんだつたんだろ？、あれ？」

「私に聞かれても……」

「あたしに聞くなよ」

「…………俺に聞かれても、返答に困る」

ほんま何やつたんや、さつきのは？

翔子ちゃんつてほんまに雄二君のこと好きなんか？あのがいわゆるヤンデレつちゅう奴か……いやははや、恐ろしいものやな……せつかくいいムードやつたのに、霧島夫妻が登場した瞬間あつといつ間にぶつ壊れてしまつた。

しかも。

「本当に仲が良いカツプルですね～」

「憧れるよね～」

「いや、あれのどじが仲が良いつていうんだよ…………」

ヴィータのつゝこみも耳に入つていらない様子で羨望の眼差しを浮かべて夢見心地な瑞希ちゃんと美波ちゃん。いや、ほんまにあれのどこがベストカツプルつていうんやろか？あればもつ尻に敷かれる、ちゅうレベルを超えてるで？のろけも何もないやんーどじのホラーサスペンス「ミックみたいやで！！

「…………康太君、とつあえずアキ君達の方にサーチャーを飛ばしておいてくれへん？」

「…………」「解」

そう言つと康太君はバッグの中からお手製のサーチャーを数個取り出し、透明にするとそれを一人の元へと飛ばしていった。これで二人の様子を見ることが出来る。

さて、問題は……。

「はつー見惚れてる場合じゃなかつたわー！」

「そ、そりですねーはやくちやん達、一人がどこに行つたか知りませんかー？」

「私は全然見てへんかつたで？」

「わ、私もー」

「あたしも見てねえよ」

「……………カメラの調整で忙しくて見てない

「ああ、もつー」「つなつたら行くわよ、瑞希ーー！」

「そうですね！行きましょー、美波ちゃんー！」

釘が埋め込まれた金属バットを片手に（ビットから持つてきたんやねん）二人は映画館へと突入していった。

はあ、まさかアキ君達のデートを見に来ただけやのに、一人のボディーガードをせなあかん状況になるなんて思わなかつたで……。一人ともーどうか無事にデートを完遂してな～。

第八話（中編）（後書き）

次回の投稿は結構間が空くかもしません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6553x/>

バカとデバイスと魔導師～バカが奏でる絆の曲～

2011年11月9日16時15分発行